

工卜R-84

故天野信景翁著

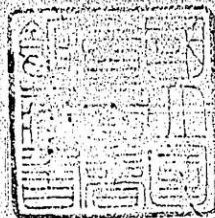
百卷本

隨筆鹽尻

下卷

帝國書院刊行

049.1
A438



271789

天野信景翁鹽尻零本

鹽尻上巻頁二四四
至二六頁參照

舊箋云人見磯邑先生家隸山田衛兵衛所藏先生曾賜於衛兵
衛者也

此ハ要齊細野忠陳氏ノ舊藏ニ係レリ氏ハ名古屋藩士ニテ篤學
ノ儒者ナリキ嘉永安政ノ頃天下騷然トシテ古文書ノ如キハ顧
ミルモノモ無カリシ時ニアタリテ隨見隨購多年蒐輯ヲ怠ラザ
リキトテ惜哉子孫不肖ニシテ家ヲ破リ今ハ一物ヲ止メズ名古
屋人山田俊一ハ氏ノ門人ノ門人ナルヲ以テ其ノ二三ヲ傳ヘタ
リ天平寶龜ノ古文書四通弘安ノ日記鹽尻零本即チコレナリ予
後一ニ乞ヒテ悉ク之ヲ獲タリ附記ス

人見磯邑先生トハ人見彌右衛門崇ト云ヒシ儒者ニテ鹽尻中
ニ其ノ名散見セリ

大 口 周 魚 記

(天野信景翁自筆墨尻原書。大日鯛二氏秘藏)

小野道風は敏達帝の正参議宰^{ミツナリ}とて孫父ハ大貳^{フタツツ}有^ア然^ニ
 麒麟^{キリン}故^コに尾張^{オウヱ}の國^{クニ}の人^{ヒト}と云^{イハレ}ゆに春^{ハル}日^{ニチ}耕^{カウ}於^ニ才^{サウ}田^{テン}
 村^{ムラ}の村^{ムラ}氏^シ傳^{デン}云^{イハレ}村^{ムラ}の里^{サト}ハ道^{ミチ}風^{フウ}の里^{サト}也^{ナリ}云^{イハレ}云^{イハレ}

天正十八年八月初日
 本神若率兵入市
 或引營為疑

江戸の城に文正年中上杉右衛門尉憲忠の長子有
 祐資木道道灌築めらるゝ一區のこゝろを山
 本町佐京救兵衛城と云ふ。京救北條氏に属して
 相州・河内・立花・赤井・村・朱・松・木・高・等とて江戸の
 城を守りてに京救の惣奉行の村・高・等といふ所は張汝忠

慶長元年二月四日 中德大相國東海邊越後道身別
路筋に 命して各一里ごとに坂と麓との樹と極
しつたき同年五月下旬にふくく内能す一介に
ありて行人累程と辨むる 公の賜也
同年八月江戸増田御奉行より賜り高野山御奉行
東照宮御所の御より
同日十九年平坂の役終つて元和元年八月終りより
味方の獲し賊首一万五千三十餘級と云々伊豫本馬元
永田常康是と監せしとせん
浪飛田院清や神聖南方より赤坂をさうあらく直記

足たり康二年十二月間徳康本所 上府左近將監中村
源忠常三千人吉野に入明年慶長元年十二月二日に徳主
と殺して 神聖と夜をさう同日十二月八月五日 神聖
赤坂路のう 足たりけ記をいふれりさうり 將軍東書
るい徳康本所とあすけ記と足たりや
或人曰當時平騎執身にして劔と短鎗と揮り武勇と
働りしめと武居んをいふけ武居んを世に大男にあり
まれり其極に強氣にして人に強はす已てまて人とた
家人の功名も身の相とさう人信にうとさ教人の與する
執獨の働むるなりは能にいつも小男にてゆる彼教と與

回と持天トで傳う人と云ふに、ミナ年がして人を救ふ功
立てんとおすんを、ミナ隨從の人と云ふひを、ミナ傳うて城と
攻めんを傳て、ミナ無下に附ける、ミナす敵に、ミナ人救ふ
か、ミナなりて、ミナ大勇と云ふ、ミナ小勇と云ふ、ミナ此
孟子の教とて、ミナ理合す、ミナ或人の評に、ミナ舟楫圓實、ミナ自當あり、ミナか、ミナ目見、ミナ此、ミナハ
評て見、ミナ傳り、ミナ三十卷あり、ミナ又、ミナ舟楫、ミナ家、ミナす、ミナ此、ミナハ
藤波家の云、ミナ第、ミナの、ミナ證、ミナ中、ミナた、ミナふ、ミナり、ミナ實、ミナ第、ミナハ
に、ミナあり、ミナ足、ミナ傳、ミナ但、ミナ此、ミナ古、ミナの、ミナ目、ミナ見、ミナ此、ミナハ
わ、ミナて、ミナ今、ミナ人、ミナ親、ミナ王、ミナ評、ミナ撰、ミナの本、ミナと、ミナい、ミナふ、ミナか、ミナに、ミナの、ミナ當、ミナり、ミナ
の、ミナあり、ミナて、ミナ舟、ミナ楫、ミナの、ミナ刺、ミナ点、ミナと、ミナい、ミナふ、ミナ傳、ミナ此、ミナハ、ミナ官、ミナ家、ミナに、ミナ

避子説

明儒楊升菴曰、ミナ舜避堯之子、ミナ授受非私也、
何、ミナ避之有、ミナ如、ミナ其、ミナ不、ミナ當、ミナ受、ミナ則、ミナ顯、ミナ辭、ミナ於、ミナ庭、ミナ何、ミナ必、
俟、ミナ君、ミナ薨、ミナ而、ミナ後、ミナ辟、ミナ今日、ミナ方、ミナ避、ミナ而、ミナ明日、ミナ偃、ミナ然、ミナ又、
来、ミナ是何、ミナ率、ミナ措、ミナ乎、ミナ至、ミナ謂、ミナ孟、ミナ避、ミナ禹、ミナ之、ミナ子、ミナを、ミナ爲、ミナ無、

稽

謹按、ミナ楊氏疑、ミナ孟子之、ミナ語、ミナ者、ミナ猶、ミナ多、ミナ矣、ミナ凡、ミナ孟
子七篇中、ミナ獎、ミナ勸、ミナ不、ミナ一、ミナ待、ミナ問、ミナ如、ミナ撞、ミナ鐘、ミナ或、ミナ門

人以當世所傳故為問難則孟子直就其事答之詮解其意則若有如此之事則其举措也當不過如此也不必以其事有無論辨之是則孟子之家風也一且萬章問人曰帝堯當日以天下授與舜夫天胤有所嗣神器至重然輕與一鰥夫而可乎敢問果有此事諸否乎是蓋當時如子噲子之之派皆借堯舜之

授受為口實故萬章有此問也孟子答之曰虞舜有天下執天衡者天必命之與之人必從之與之唐帝不能以一己私心而以天下與人遂因堯當時所傳語云昔者木舜相帝堯日久矣迨帝崩避去帝之子於南河不敢當攝政舊職其意蓋欲有天下之民思慕堯德而歸其子也然諸侯與國人皆戴舜德盡歸

之而無歸。堯之子者，推舜爲天子。舜避之而不可得，以此之中國，即真焉。如此語，則舜固至公無私，雖答天下之心，而實兼之天意也。其所謂禹益避陽城，避箕山者，雖近戰國遊辭，而似蹈襲舜之所爲，而取其意，謂之則天與賢，則與賢天與子，則與子而不敢容人爲之私於其間者，此時語以足稱禹益，今萬章以

舜禹之事爲問，孟子即以有其事，時語在，直以此答之。其所主則見所以堯舜禹之心，皆無一毫私意，而任天命人心耳。何論其有無？自丹朱之不肖以下，孟子重因時語以發明民之從賢從子，亦皆一出於天命，非人力所爲也。謂聖聖授受之際，有莫爲而爲者，實至矣盡矣。凡讀孟子之書者，須先理會其一章

立言答問主意莫徒就一事論決之明
季諸儒多忘一書本旨依言語爲其解
或以管裡豹自主張苟議先賢微言而
銜一家私說可謂無忌憚之甚也夫孟
子當戰國無道時憫教化衰廢人心陷
溺獨發明孔子之學以性善闢異端以
王道黜功利進則告列國諸侯退則與
及門諸賢反復論辨以著七篇書其言

皆以大歸大義爲先豈區々尋故事小
說鑿其有無乎嗚呼自王充刺孟以降
若馮休刪孟司馬公疑孟晁以道詆孟
及李太白常語鄭學藝圃析衷黃次叔
評孟雷同皆求其瑕語以數其非然柳
子厚作刺孟余隱之作尊孟辨紛紛
衆疑且五峯有辨疑孟說朱子有讀尊
孟辨學者宜看之可也吁紫金燈火

049.1A+38

選子說終

愈見精光七篇因群疑益知其真况我
 子朱子取諸氏之正說會萃折衷以叙
 其義與本學論語中庸列爲四書洵
 之正傳於此明備乎進道之聞豈越干
 此讀集註者不可不盡力
 辛巳秋講孟子或問選子之說故書以贈之

元禄十四年九月十六日
 天野信景謹書

鹽尻卷之五十一 正徳

近世見開花 近年四民貧究して
 江文蔚か蟹賦
 虎の角をみよ三種有そくかくた
 源空勸諭
 自譽上人圓光大師新傳
 幼少にして亡母を弔ひし事
 忠誠の従者
 府下光照院長行會
 癸巳正月院御會始
 琉球王使入貢
 豫州松山火災
 關東新大納言將軍宣下 大光禪院の櫻
 正覺寺上人說法
 王漢所歸之島
 閑素幽栖
 唐茶贈答の詞
 幕春遊古井庄吟
 癸巳三月京師火災
 僧岡谷寫經
 石枕村の稻荷
 内宮月讀宮大松樹
 社毎紙幣を獻
 新君家廟公御元服記
 天英院殿御上階
 古服たすきひれ
 豊前國高良山
 尾府東照宮御祭禮
 今年立夏遅し

忠吉卿御發母 池田恒利略系
 福島掃部介子孫 竹腰氏略系
 熱田神饌五六餅 中村長兵衛
 忠度十三夜の歌 蕪物の制久し
 香瓜のかりもり としみ
 蓮生法師三人ある事 千木 堅魚木
 繼哇 我國中世の國制
 繪所狩野家略系二圖

○富貴怕見開花言已開則謝適可喜正可懼爾今有方值豐亨便生驕溢喜筵慶賞過飾婚喪伎樂聲容沸騰頭動僕服食珍麗齊整夫無德當貴謂之不祥宜急懼思何暇誇俊許台仲

○或人曰近年四民困窮して貧饑に迫る者多し其中に仕官の家殊に財用不足して毎に徨々たり時の然らしむるにやと予曰凡そ應仁文明の大亂の後我國治教ことくすたれて雅意に任せて事を處し力に隨ひて郡邑を領せし當時人皆強悍にして武事に專なりし世治れる後も風俗革らして六七十以前國に采地ある士其民を剋剝する事殘暴不仁に至らざる所なかりし既に冬月に及へば家に其民を召て其貢分を訶督するに民も亦剛戾にして大かた善督に至れ共其出す所を憐れて諸せず故を以て或は木にのほせ水に入れ或は縛して雨雪にさらし其妻子をさへに酷毒して悲鳴啼泣の聲戸々に満ちて逼勒凌虐のあさ家々ひとしかり或ひは細民の舍を破り農家の産を盡さしめて貢に宛つ故に其入る所今日を以てはかるに其多き事半に及ひなんそのかみは民を剋戮するを以て武士の常として尤に效ひて忌

憚る事なかりしたまへ威逼せざる者をは僧法師の如しと嘲り彼何の軍事をかなすへきなんとわらへり扱家内の男女治容を知らず衣食亦文華の彩なし客を饗するにもいとふつかなるさまして只氣力の強きを先とせりかへりしほとに農商も其分に居て驕をなさりし治日久しきに至りて諸家其祖先の殘忍を以て身喪ひ家絶はつるを見て自狠すて思恵を念とすといへとも道を知らざるか故に只身心の安からん事を謀り風俗年々に驕り荒淫倦怠に財を盡して民の生産を省さるに及ては村民も亦督促の時にゆるきになれて遊手閑を好嫖賭に佚し因循して己か産業に惰る此時商家時勢の好嗜を見て衣服及び器什に無益の美を極めて街人々是に眩き外飾に移り適意を事とす是を以て上下財たらず息を出して富人の金をかりて事を辨ず然るに奢る所は日に厚く費す所は月に多し責家の徵索きびしき故に家々典質に盡さ士德惻して義をすて民匱竭して逋となるといへとも數十年來の習俗改る事なく却て花美に流れ且太平時靜にして人民百年前に倍し物の價ひ一年一年より翔貴し終に今

照胸中才甲常聚衆以橫行なんといへり沙頭郭索衆橫行豈料身歸五鼎烹シヤ後水尾院御製に

よの中はあしまにはしる蟹なれや

○鹿の角を解すに二種あり格物論に鹿は冬至に角解オシカ鹿は夏至に角解すといへり

○源氏物がたりにそくかくたといへるは山伏の事也○釜の字歌書にうゑと讀うゑふかうゑふかおきてウケと云は訛歟ツケ源氏上ふしとは柴の事日本紀柴をさき水底につけおき魚をとるをふしつけといふ也綱代はわみしろの音便也

○或問源空上人を圓光と勅諡有しは在世も圓光の瑞ありし德輝を萬代に表し給ふ敬慮とかや重諡に東漸の徵號を授させたまふ是佛法東漸の謂歟と予曰然り但し知恩院再興唱知識の文に隣西都念西方之勝樞ト東山表東漸之靈地也等云々然らば是東山に教法を弘めたまひし德にして直に知恩院の事を稱するなるべし

○又曰源空の忌日は天子の綸命に御忌とある故な

日積窘の愁ひ街に滿侍る豈一朝一夕の故ならんや去年の冬我府下の諸士采地の貢數去年に減せずして糶の價往歲に増して高し然れば綿力も此時健になりぬへきを中々なる究苦往日に過たりこれ久貧にして欠缺せしうへには少々の有餘ありといへとも益なしと見えたり嗚呼いそぎゆく夢の間に世の變態を見る事いくたひそや身の故にくるしみ人の爲に愁ふる事のみにして聞なるいとまなく毀譽激懸互ひに至り存没否泰目にさへさる年くればはて市井のいそかしけなり何事をか待春を向へ老となり行身はいづれ原上の土となるへき物を名利の路に走てあたる世を恐れ侍る事我人同し耻へきの甚しきにあらすや

○十日書一水五日書一石能事相促迫する事を不受か爲也筆筆輒成水水は張氏名か妙處なり其觀をなすに至りてはとるに良士の手段のみ王猷か牛不興か蠅誤筆却て絶妙を得たり通神の書聖豈凡筆と同しかるへきや

○江文蔚か蟹賦は嚴續か位高くて知寡きを鄙議れる文也外視多足中無寸腸口裏雌黃每失塗而相

へて御の字を呼事徳の至りといふ然りや予曰亦如此但し御忌の稱呼は知恩院一寺に限るへきにや給は知恩院のみ歟

中世迄知恩院の御忌と稱し餘寺のをは知恩講と呼しと云々大師行狀卷五十二

○亦問近花頂の白雲上人圓光大師の新傳を述せられし中に我故二位家光友卿の御事をものせられ侍ると如何にや筆せられしかと曰贈號繪詞傳下卷に曰さりければ畿内近國の末寺東國西國の末流開及ぶに隨ひて各上洛し慶賀をいたす尾張大納言光友卿は殊に歷代の芳躰をしたひたまひて今なん頼もしき宗門の金湯にて物し給ふか大師號の事御隨喜の餘り香資を御影前にぞ贈らせ給ひける其外公家武家士農工商の輩に至る迄大師を信し念佛を行する者は皆隨分の供物をさへげて參詣せり略書

かく記され侍るされば二位家御在世の御時御領國は更なり處々の名樞勝地に御寄附の御志尤多かりし殊に蓮社の宗は御造祖已來御崇仰の御事にて今一しはの御信心も淺からず圓頓戒御相承の後は御念佛の數もまめやかに聞えさせましける悲田

右癸巳三月所聞也

○日置村に隔夜道心の僧あり此頃笠寺龍泉寺へ參り物し侍る今年二月の末坂野近きあたりにて八九才ばかりなるおさなきもの打なみだぐみて僧の袖をひかへ頼參らせ度事ありと云何事と問へば御母なくなりて三とせの忌日もあすにて侍るとぶらびすべきたよりも侍らす願はくは念佛申給はれとて袖よりあし三十文ばかり出して施す僧もあはれに覺えてなど内にてはとぶらひ給はぬそといふに今の母なんまゝしき事にて過し母の事なんと申出侍るも思みにくみ給ふ故此頃松の落葉かきあつめてしるとなしかくたてまつるとて只なきになきぬ僧あまりのあはれに物も覺えずやゝありて法名覺え給ふかと問ふに懷中より守りやうのもの取出し此内にそ侍るなれと物かき候はぬ身はえよみ侍らずといふつとひちき見るに戒名あり是かと讀みかすはとにそれにて侍るとて打伏ぬとかくいさめおこし我袋に鳥目少しありしを少年にあたへ是はこゝと人にえし物也これにて花買墓にも手向たまへとてなくくわたせしをいさや我こそ奉るべきにい

邪義日蓮黨御いましめの時あはれ日蓮が邪風をばいづれとなく天下に禁せられよかし御封内一局が程にはたやすく斷絶まし／＼なん物をと仰事侍りしとかや

○去る年にや有けん熱田放生會の頃御儀殿の邊に中間らしき男鎧をもち幼き者二人に草履とらせなんとして錢を乞ひ侍りし其後は眞福寺の門前なんどにてもかくせし人々あはれがりて物とらせなんどせし此頃聞侍るにこれは肥後熊本之士喧嘩せしか彼家の從者討れし主人の子をつれ立退すかたをかへてかゝるわざして野にも臥し山にもかくれ心をつくしけるに至誠天道もあはれみ給ひけん過し冬飛州某の地にかたきありと聞定め忍び入て首尾よく主人の子にうたせ國に歸り侍りしとぞ今一人の少年は從者が子にて侍りしとかやおさなけれど父におとらずかひ／＼しきふるまひせしと街談實を傳へ侍る定て國の守に達して再び仕へ侍るらん武林の家に生れたらん人誰かはかく侍らざるべきなれど其從者が心をくだき侍りし忠のほどいともたのもしくかたじけなき事ならずや

かてもらひ侍るへきといふにこれは亦我志し成とてわたりしければ立歸り亦錢三文僧にわたし花手向させたまへとて咒して歸りし僧は袂しほりながら庵に歸りあたりの同法をあつめ一夜念佛しつとめて時なとかたのこくいとなみねんころに吊ひ侍けるとそ正覺寺の上人聖覺説法の時聖蹟寺一萬日つふさに語り自涙にむせひて打しばふかれしかは聽衆いつれとなく皆袖をうるほし鼻打かみてあはれかり侍りしとて浮世の姿當且貴き袖にはかかる志も夫れ／＼にしかも忠孝のまめやかなるは聞え侍らす人誰か木石ならん是等を聞て誠に感する心あり此心あらは何そ君に忠し親に孝せざるへきをひたすら慙にけれ我と我所との執念のみ深く君恩を思はず親の心に背き或は色にまといて身を亡し財を貪りて名をくだすたくひ萬々なるにや自省警て道に入へき事也

○府下光照院四十八晝夜長行の會に坂東なる某の上人來りて説法せらる日蓮義のひかめるさまなんと日々に正しきこえけるはとに彼黨の僧俗いとむくつけくそりあさける本遠寺の僧はこれを狂人

○癸巳正月十三日院御會始

うつしとるそのよの琴のわかぬ音も

しらへにそふる春のうくひす

中院正二位通躬

梅はまた笠にもぬはて琴の緒に

聲よりあはす春のうくむす

これもまたゆらくたまの緒ひくことに

此外これを略し畢ぬ

○二月五日未の時より暮過に至る豫州松山の城下松平殿守士庶の家三百餘宇燒失せしとなん西國より來りし人の談なり

○琉球王使入貢來年午の夏六月來れるよし依て薩摩中と云々

將家參府ことしも延引可有よし關東の命と云々
○關東新大納言家將軍の宣下ましますへきよし豫有
司を定させまします御年老是土屋相州事を奉せら
る其他水野大監物高家には織田能登守となん上落
の上使松平下總守とぞ聞えける

參向公卿
近衛前攝政家兼照公
九條左大將家師孝卿
德大寺大納言公全卿
庭田前大納言重隆卿
梅小路前中納言共力卿
萬里小路宰相尙房卿

院使
女院使
御衣紋は高倉前中納言永福卿御身圖に土御門侍從
泰連朝臣等下向し給ふ近衛九條兩家は三月九日京
を發しまします亦今年日光例幣使は六條宰相有藤
卿四月朔日出京と云々

○大光禪院の櫻咲侍りしを見て思ひ出る事のみ多かりければ
幾とせの花にいのちををしみ來て
あはれ老木の春もつれなし
同じ頭月のあかりし夜のかれ行事侍りしに思ひ

勅使

院使

女院使

萬里小路宰相尚房卿

納言永福卿御身國に

泰連朝臣等下向し給ふ近衛九條兩家は三月九日京

を發しましたす亦今年日光例幣使は六條宰相有藤
卿四月朔日出京と云々

○大光禪院の櫻咲侍りしを見て思ひ出る事のみ多か

りければ
幾世の七つちををしみ來て

幾とせのわしいのちをさす。さすはシ
つはれ老木の春もつれなし

同じ頭月のあかりし夜のかれ行事侍りしに思ひ

つゝ侍る

これもまた幾世の春のかたみそと

おもへはかすむ袖の月かけ

庭なるさくらのいとおもしろく咲侍けるに

思ひいつる花こそ花に咲にけり

春よむかしの春ならねとも

同し折から近寺一萬日不退轉の念佛回向とて人の

多く参り物し侍る其開白もまぢかく覺え侍りしに

三十年ゆく春の浪立へたてし跡を斐へらわてい

と死しかた悲しく哀なるものか不一目見

幾數そへて花のちりけん

○正覺寺の上人堅空來りて説法有し聞名欲往生の文

なんとぬもころに述べられしをきゝて經木に書付侍

る

おとにきく名にさそはるゝよしの山

こゝろのおくの花のしら雲

○弘法大師玉藻所歸之島橡樟蔽日之浦と三教指歸書た中

ひしは讃岐國多度郡屏風浦の事とぞ萬葉集に人丸

の玉藻吉嚙岐國と讀たまひし橡樟蔽日とは成安の

鹽尻卷の五十二

-七-

御元服ありて後御規式に供奉せし事賞しますます

御太刀^{長則}十五枚 御脇差^{正宗}代百五十枚 御馬鞍置

彦根中將に賜ふ

御刀^{守家}五十枚

會津中將に賜ふ

四月二日將軍 宣下

近衛九條御兩家及徳大寺殿庭田殿梅小路殿萬里小路殿年始の御ことふきも兼て來臨と云々

御衣紋^{高倉}御身固^{土御}有て新君出御事故なく禮義行はれはへる

官人^{此中高辻家及ひ少内記縫殿允三}

高辻少納言

押小路大内記 副使 青木雅樂頭

壬生官務 副使 結城右衛門尉

告使 栗津治部大丞 地下平田少内記

副使青木縫殿允

尾張水戸紀伊家并諸大名登城御式前々に不異云々

堂上家御製應之大名

勅使 伊東大和守 ^{仙洞使 毛利周防守}

將軍宣下に依て別に女院使 福島飛彈守

近衛家 中川内膳正 九條家 溝口伯耆守

右之外有司多し略之

同五日参向の公卿以下大廻猿樂等有之

開口 近藤

それますらをのあつさ弓やしまの外もなひく代

に初もとゆひの紫の藤波遠く夏かけし松の榮え

はいやましにめてたかりける時とかや

式三番^{松色} 高砂 田村 東北 張良 祝言

同七日御返答の式ありと云々 太平時靜にして嗣君

御代しろしめす御事おほけなき御事ながら天下祝

し奉るへき御事也

○或問豊前國高良山カウラは字音也さればいにしへ

よりの名に字音を呼ぶは如何と曰是は香春也カハ

ラと訓ス續日本紀承和四年の條に豐前國田河郡香

春三社といふ是也

○我國古しへたすきひれなといふ物を服せしたすき

は中世迄着袴の時に服せしに一條院御はかまきの

時より小袖を着しましたと古記に見えたり

たすき白練綾紋は小葵^{ツバキ}うらは白き平絹也三幡懸

緒のひろさ三寸治承四年東宮安徳の御着袴の時

まつ人にさゝてかたらんはとゝぎす

わがためならぬ初ねなれども

といひおこしけるほどに

わびてすむ宿もすさめぬ時鳥

うれしとぞさくけさの一聲

○尾張三位忠吉卿の御養母押賀茂殿と稱せし^{おみつ}

三位家範御後三州上野へ移り住せ給ふ^{殿長十三年十一月四日逝す}

吉秀院光譽貞祖大禪尼と云上野村松隣寺は其香火

の場にして五十石の寺産あり

我府下の真松院は始清洲に立を遷府の後に今の地

に立と云々

○池田紀伊守恒利は攝州の人也^{補正行男池田十}

將軍義晴公に仕へしか故ありて難髪し宗傳と號し

尾張國愛知郡一柳庄荒子村に移り住し信長公の乳

母を娶る是江州池田家の女なりとかや

○恒利^{紀伊守} 信輝^{紀伊守始ハ勝三郎恒興ト稱ス}

輝政^{著名新吾彌三}

輝政^{左衛門從三位}

○福島左衛門大夫正則の弟掃部正頼とて有し勢州

長島石一萬を領せり後に和州宇多へ移る石三萬然るに罪有て領を放たれ勢州山田に住せられし金なりてとやいふ有し金銀を似せ返され其頃本多上野介正純の浪人寺田勘兵衛といふものあり其子伊勢に來り間の山にて掃部介の男二人と喧嘩し福島兄弟を切殺せしかとも疵數多蒙りしかは所の者捕へて奉行へかくと告奉行花房志摩守は福島正則と友としよかりしかは寺田喧嘩の仕方宜しからざりしとて切腹せしめて事済にけり近き頃掃部頭裔とて幕下へ召出されし福島助六は彼寺田に討れし兄弟の内兄の孫とかや聞えし福島兄弟名不知可尋

○竹腰氏は佐々木庶流本貫は江州竹腰村家の紋四ッ目結と云々

○源重繩一作綱竹腰七郎仕書藤山城守法名道珍或作道綱

重吉 攝津守

女子 竹腰正安妻

重治 攝津守子孫多

正安 本氏原谷集竹腰

重繩 女一稱竹腰

重時 治部右衛門

正時 助九郎仕上杉景勝

正時 於奥州會津卒

「正信從五位下山城守子孫多仕虎公正保二年四月廿九日卒號正信院安樂道親一母志水加賀守女」舊記に曰竹腰正安は金森の族にして土岐の流原氏といふ一説曰正安は齋藤の族と云々梅鉢内の紋金森家紋なり或説云齋藤氏代々崇天滿天神故以梅鉢内爲紋仕齋藤氏の時以爲其一族所恩賜之紋也

○熱田の宮神饌の中に五六餅とて長さ七八寸計り管のこつく調せし餅多く盛りて供す俗御管餅と云五六の名義如何と問ふ人あり祠官に問侍りしもたしかならず按するに是材木を積かさねたる形に似たれば斯いふにやいにしへ太物の五六にて打附たるを棧敷太平記なんといふも當時の材木の名なれば思ひ合すへし古しへは安の部なんといふ材木あり今源太郎及ひそ木なんといふも後世に呼かへ侍るへき歟ひそ木はそ木の轉訛なり

○明智光秀を栗栖野にて突し野武士は此村の浪人中村長兵衛といひしものとぞ云々

○をしめとも秋の半の月はまたこよひもありと思ひなされき平忠度の歌也十三夜のうたこれぞたけ高くよく聞えて情も深く覺え侍る

○葦物の制久し源氏物かたり梅の枝の巻に出たり一條院の御時盛にもて遊ひし故式部もかゝる事書けるか其時は沈水香はかりわたりて今のことさ伽羅はなかりしにや有たらはなどか書さるべき

○我郷俗に秋に至り香瓜の末なりをかりもりといふ京なる人名のをかしけなるを笑ひしか此頃和歌二言集といふ物を見侍りしに

大原や田中のむらの瓜つくり

といふうたあり京にも元はかくいひしにや物の名も時によりてかはり侍るは常の事也けり

○としみ源氏物かたりにあり年滿と書也四十よりはしまりて八九十迄十に滿る其年と行末も十年十年に滿へきもいはふ也春あるを花の賀といひ秋あるを紅葉の賀といふ其時節をさしていふなり

○蓮生法師三人あり

熊谷次郎直實入道號法力房蓮生

宇都宮藤原賴綱入道號實信房蓮生洛西聖光明寺開祖賴綱入道集入

山田先生重直會孫源重行入道法名蓮生

○神宮の造制千木は搏風のあまり打違て指出し鑑の

すかた堅魚木は今俗いふおんとの古風鞭懸木はやぬい竹の端也皆質朴の時の有さまなるを後世さまの理説を設て却て上代の本義を失ふ事多し其外鏡形の本障泥板も上久の制也

○鑑田の哇はなのううけ 堞あせなは 溝みぞ吹ふ 畠はたけなり

一間四方を一步といふ或は一坪是を三十集て畝と云十畝を一反といふ十反を一町と云ふ

○我國中世の國制

一國々々の内に郡を分ち郡の内に庄を置て村を統ける郷縣の名あれとも唐土の制と同しからず保は頼朝以來保司を置れしよりの名歟

○繪所狩野家略系

○狩野祐清

元信 古法眼

松榮 法眼

雅樂介

茂信

休白

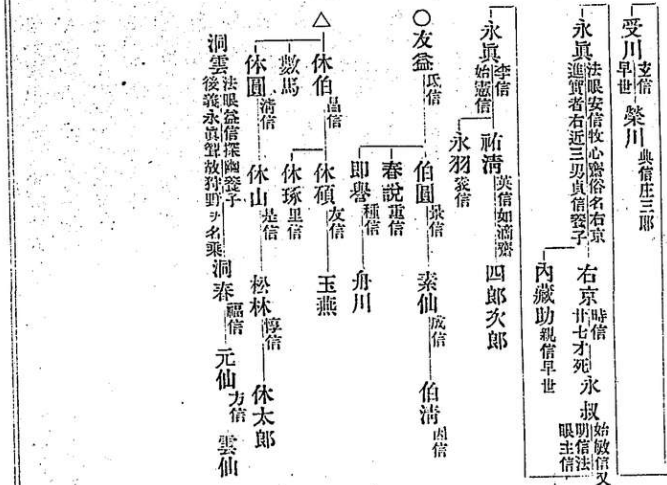
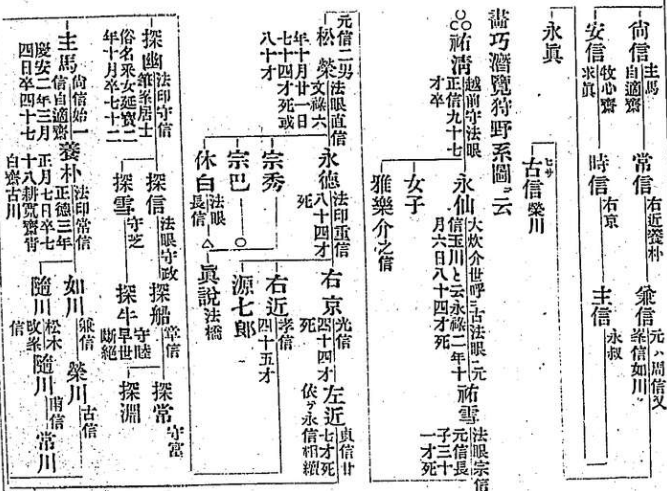
守信 探幽法印

益信 宋女

義信 洞春

守政 洞書

守定 重探筆



鹽尻卷之五十二 正德

冬至乃賀 瀬朝樂事に 左門右門之稱

順清公 眷屬 歸命 傳教作之大黒天

埒埒 殿府節分の俗習 舉氏挂綱羅

大元師法 有職私記 女院崩御ニ付賀茂祭不行 俗間夢想の妙藥

黒膏 醫藥劑の多寡 南楚和尚答書 甚目寺釋迦堂僧形

無自是の豪傑 明徳 酒店壁間詩

種樹之法 野間庄大御堂 明太祖善惡報應理言

兵庫湊川寶勝寺記 人家子孫累々として 熱田太宮司紫袍を著す

後魏の景明年中 宋の楊偕 范文正公一書生か爲

文照殿御實母 宋の楊偕 頃日錢貴かりし事

亡靈に水手向る事 清揚院殿卅三回勅會式圖 天竺へ渡いと艱難成し事

千里されといふ織物 瘍醫 首如飛蓬 いふき山しめちか原の艾

五月五日百種草を采る事 猿猴の月故事

いたちの火柱 島國狐なし

世尊寺の本尊 唐玄宗時官女多數

和峰上人示上綺筵一律 櫻井の里の歌

國の枕詞 南尾略圖

禮儀類典

○異邦にはいにしへより冬至の賀いと盛んなりと聞ゆ朝鮮王も此日を以て陳賀すとかや李東郭我國は朔旦に冬至あへる時朝廷御賀あるのみにして士庶は此日何事たる事を知らざるもの多し神院わづかに祝事有

冬至の前日所化の僧方丈を饗す

○錢塘の回汝成が熙朝樂事には凡そ四時其風俗のわざをつぶさに記せり元旦の賀禮往來交慶するさま我と等し少年の遊治歌吹等さまの事を以て懋む十八日に至るを放魂と呼び其後學子は書を收め工人肆に返り農商各其業を執るを收魂といふとかやされは元正には栢枝を栢餅に煮し大橋を以て是を承てこれを百事大橋といふといへり

栢枝と百事と音近し大橋と大吉と音通せり我國たいたいを代々になそらへかうしを幸事に呼なとするも同じ俗意也

立春の日は僂人戯子小妓等種々の藝を張り郡守は僚屬を率て出春牛を作り市街競て麻麥米豆を以て春牛に抛打等いへり我國節分の夜豆を打つもこれに似たり皆陰氣を

追ひ陽氣を迎ふるわざなり

亦民間七種の生菜を食ふ事又立春の節物とせり其毎月のおさいとくたし時食俗事多し

唐宋の時歳今是不舉の事多しと見ゆ我國詞章の人故事なればとて古へありて今なき事を詩句に作り侍るも大方拙しや中和節二月なんと言と歳を同じくせず端午の糗糒蒲艾葉を用ゆる事は古今等し立秋の日楸葉を戴き秋水を以て赤小豆七粒を呑なんとする事古へよりの姿ならざるにや四月八日佛生辰以盆坐銅像浸以糖水覆以花亭といへるは我國一般と覺え侍る

二月十五日寺院啓涅槃會談孔雀經とのみひて其像の事なし疑ふらくは涅槃の相像は唐土にはなきにや

○或人問明朝の皇子今絶へてなしやと予曰寶永庚寅琉球皇子入貢東都にして大高季明薩摩中將家の邸に於て王子の清に朝せし事を聞聞し中に前朝皇明の子孫今時小邦を封し順清王と稱すと答へしを以て見れば其祀を奉する末裔有と見えたり

○或人問近世左門右門等の稱を東百官なんといへと

戲馬道也と云々

○馬 同抄に云馬場也封道曰馬場以二馬一相軌馬於中行則不顛蹶也云々發隱云短垣圍馬曰馬場云々

按すにラチに兩字ありて各異也馬場は馬場の道馬場は土居なり

○眷屬 妙宗玄義曰親愛故名眷屬ハ顧念也 更相臣順故名屬國也附也

○歸命 香象起信論疏曰歸是敬順ノ義命謂諸佛教命云々

○大元師法は秘密の修法也昔山城國小栗栖に其堂ありし今は廢亡せし台家には江州金勝寺に大元堂あり山門三光院其像我府下眞福寺にあり

熾盛光佛頂の法もまた密家の大法也台家には青蓮院の内此尊を安置する堂ありて傳へ行はせたまふ叡山の安祥院に傳教大師の作なる大黒天の像あり世間流布の像と一般にして長高しと云々

○震澤長語に明の成化年中北京に物あり狸のごとし倏忽として風のごとし人の顔面を傷り手足を噛む一夜の中數十發其名を異骨と云 皇明通記に異骨

○馬 和名抄に云馬場 四聲字苑に云馬 力賜反典旁同 世間ニ云良知

其疾如風或戸牖より入る密室といへども至らざる所なき故に人家昏迷す手足身面を傷れば黄水を出す數日偏癱これ爲に驚憂せり暮夜に至れば戸々及を持し燈を張てふせぐ其黒氣來るを見ては金鼓を打てこれを追ふ其形黒くして小さく金睛脣尾犬狸に類するなるといへり我國に此妖物なきにやとひふ人あり予曰先に聞し今周防及び筑紫あたりに所々此物あり夜中牛馬を傷ふ故民人鉦大鼓をならし狩出して殺すといへり京近き國々には聞えず坂東の國かまいたちとて黒氣疾風ありて人疵つく事ありといふ此物にや

○駿府に往し者かたりし府中節分の日暮前より市井菰をおろしあるし豆をいりて家々待顔なりさて淺間の社には神人多く出て餅豆を打て本社よりはじめ末社々々一同に手を以て御戸を撃事夥し町へは地震のやうに聞ゆこれを聞て家々一時に豆をうち便戸外に出て家の内の男のかきり戸々己か菰をたたく事物いふ音も聞えず雷同してしはしすましかる事しらぬ旅人は宿にて大に驚く者多しといへり所々の風俗世にしらぬ事多かる

○有職私記は清家の秘記なり予幸に多年の疑を晴侍る一二にわらす太神宮に侍る所は不今日堂上家の職は滋野井野宮兩家といひしか野宮は薨せさせまします

○舉氏挂綱羅動足綱機陳孔璋が哀紹が爲に豫州に擡せしことはこそくるしけれ實にも世に立人に交れば挂綱やすからぬ事のみ多かる況名綱にこめられ利機に落入たる者をやいと苦しけなるも自はいみしと思へはこそ權門にこび勢家にへるも自ら尺寸の位をも高からん事を欲し斗升の祿をも貪り侍りぬをもしはし心のこくなるかと見れば時の間に事變してあらぬ愁にしつみ侍る類ひ亦多し嗚呼聖賢蚊虻の身をわすれ風前朝露の命を省すや侍らん夫園中佳花なしといふもいかで臭草を植そへ侍らん人々貪る思ひあらすんば心地いづも洒々たらん

○或人曰去年二月四月賀茂の御祭女院新上西崩御四月十四の故に行はれず前式なりし御中陰過ても再び祭會なかりし諸州小祠の祭故あれは延引ありて後行ふと同じがらざるは何そやと曰禮云孔子曰祭

過の時不祭禮也疏云謂四時常祭て見えたり祭時大故に依て止にしを時過て豈亦祭る理あらんや其時ならて再び行ふ事あるは多くは莊觀を事とするか故か亦は利の爲にする所也何ぞ非禮をなして神をあなとらんや

家々の俗禮も亦等し人日上已以下故あれは時食を調せずされはとてあらぬ時生菜や桃酒なんどをもてなすへきや此を以て彼をおし侍らばいかてすへきすましきやと問事侍るへき山車かさりてはやし物するを祭ると思へるこそつたなければおよそ新年新嘗等の御祭何の觀かあるへき何の利をかむさほるべき

○或人云我國俗問夢想の妙藥とて一時世に用るあり元より虚誕の事か唐土にもかゝる類ひありと答ふ異邦夢中靈藥を感得せし事一二に非ず隣説宋新安張の三に渠州虞雍公が夢獲の神方は事神仙による饒州の郭端反が獼猴散等は佛護のしるし也李景純か傳及び已志に載し洪輯が受方はともに觀自在の靈告と云々其他異人夢に入りて神授の方いくらといふ數をしちす古書に見え侍る豈我國のみならん

や然して敬信他を感じて獲方せし外虚誕の説も猶多し

○異邦の藥大槪大劑か本事方に唐書を引て王太后中風暗黙して不語醫者貴者數劑を蒸して是を盡していゆる事を得る類多し今の入三五蓋を服し便効を求め醫を責る事も亦速也孟子所謂七年之病三年の艾久しくして後知らんのみといへり況や我國今の湯藥甚少劑三十年前の醫はなるをや何の病をか治すへき猶更其眞偽新舊の辨へもなく半は病を見ることくはしからす何を以てか病を療せん嗚呼拙哉庸醫

○忘肉抄は樂書也書寫山性空上人の撰とかや體源鈔も亦音律の書也是豐原氏の秘記となん

體源とは豐原の骨水也水と髓と音近き故其家自紀州故相公總持寺江五ヶ條御不審南楚和尚返答

一淨土宗僧正僧都等之官ニ進タル例有之否之事淨土宗僧綱官位前代不及承候近世鎮西派二僧正國師アリ

一神宗淨土宗官位進不進之事

テ或ハ田園ヲタマハリ佛法弘通仕ル故ニ諸方各刹
ニ於テ國家安全ノ御祈禱致スコ定マレル式ニ候我
淨土宗ハ元祖法然ヒトヘニ名聞サイトヒ専ラ出離
ヲ志シ叡山ノ交衆ヲノカレ西塔黒谷ニ隱居シ藏經
ヲ披覽アル事五返往生ノ要行念佛ナリト思定メ承
安四年生年四十三ニシテ宗旨開基ノ故ニ祖師官職
ノ望ナク綱位ニ進マレザルト見ヘ候其門弟師ノ隱
遁ノ志ヲ相傳ル故ニ僧綱ノ任官ナク候後々ニ至リ
テハ菩薩號ニ任セシ澁州立政寺開或ハ和尚位上人人位
ニ任シテ紫衣香衣ヲ着用ス淨土宗官位ニ進ムベカ
ラザル道理モナク定式モナク候

律師號ノ事

永觀律師ハ宗祖ニアラズ東大寺ニシテ戒サウケ三
論宗ヲ學ヒシ白川院承暦二年洛東祥林寺ニ住シテ
一向ニ念佛シ堀川院承德三年六十七ニシテ律師ニ
任ス僅ニ一宿ヲ經テ辭セラルト矣彼本傳
見ヘタリ但淨土
宗官位ノ例ニアラズ亦法然門弟ニ隆寛律師アリ是モ
本ニ聖道宗ノ時ノ官位ニテ候

一淨土宗三衣之事

元祖本宗ハ天台ナル故本宗ノ衣相ヲ改ラレス直弟

相ヲ立ラレ見樂集ニ教内教外サハイハズ淨土門ノ外ノ諸宗ナシテ聖道門ト名付候末師此義ヲ判シテ云ク此土入レ畢名爲ニ聖道ニ從レ穢至淨故曰淨土ニ矣

○或間甚目寺の釋迦堂北丘所僧形あり俗におそうさうと呼ふは何そや答是實頭盧尊者也寺院食堂に安置すそうさうとは聖僧羅漢云云の詔り也

尾府の俗語古へ婦人の白粉厚くよそはへるをおそうさうの如しといひしとそ是も昔甚目寺へ人毎にまゐり此像に白粉を以て面貌をぬりて願なとかけし事風俗となりし故にかくいへるとききものかたりし或人曰此像羅漢の姿ならす疑ふらくは此寺中聖觀上人の像かと

○吾輩處世勿レ以己之長ニ而蓋レ人勿レ以己之善ニ而形レ人勿レ以己之多能ニ而困レ人案予凡カ陰險維

○大學明ニ明德于天下ニ舍レ天下ニ則吾亦無レ明レ德處案同上

○天下無レ自是之豪傑亦無レ尤レ人之學問一行有レ不得皆己之德末レ脩感末レ至也云々同上

○宣化之時酒店僧間有詩云是非不到釣魚處榮辱常隨騎馬人陳繼儒事

尾南知多郡野間庄大御堂大坊・江防殿宛に「尾南知多郡野間庄大御堂大坊・江防殿宛に」
 年中の草創西方の三聖を崇む後に右大將頼朝先考
 贈内大臣資福の爲に再修すと云々享祿四年辛卯十月
 十三日兵火の爲に焼失すされとも本尊夾侍等靈異
 有て損失せざりしとかや天文三年甲午三月の勸進
 帳に見えたり大坊の藏

廣巖現住祖瑞師志願を廢し正徳二年五月二十五日彼戰役諸靈の爲に衆を會して觀音織を修し永く定式とせり

○明の廷臣善惡の報應は多く爽ふといふ事を奏せしに大祖曰善を爲して或は福なくとも然も理として爲へからざるの善なく惡をなして或は禍を免るゝとも然も理として爲へき惡なしと大哉王の言よく理を以て善惡の情を折て區々たる報應の説に循ふて理を味さず學者但善を行ふ事不能を患へよ應

にも世人報應にのみ心ありて善の必ずすへく惡の
 必ずすまじきを理會せしめていたつとに聲利を追
 ひ當世に志して善を積事能はす凡事身家の爲にの
 みばかりて生民の爲にはからず上ミ其君に背き下
 モ其親に戻り骨肉相誹ひ朋友相欺き顯に朝憲を忘
 れ幽に天鑑を省みすたまゝ惡ならざるも有所得
 の念を以て小惠をなし日を數へて其應を待つか如
 きは豈是を善をなすといふへけんや

○凡人家子孫累々として簪纓甚盛んなるあり然るに
一世の中猶究困して後なき者あり是皆祖先の徳と
不徳とによりけり嗚呼百世の徳あるものは定て百世
の子孫有てこれを保ち十世の徳あるものは定めて
十世の子孫有てこれを保つ乃至三世二世の徳有て
三世の裔これを保つあり其斬然として後なき者
は徳の至薄知ぬへしされとも亦命ありて然らしむ
るあり太伯の後なきかことさ夫一定に論すへけん
や

○熱田大宮司紫袍を服す紫は三位以上の古服なれ其一條院以來は橡ツルハミをのみ着するか但し大神宮の一

の禰宜上階叙せらるれば紫袍を用ゆる事古記に見えしされば元徳二年四月荒木田氏成度會常良同時に上階せし正三位に進みし事は天文に度會常良を始とす其後荒木田氏富度會滿彦亦正三位を拜せしされば熱田大宮司もと尾張宿禰の職なりしが季範以來南家の藤氏其職を傳へて四位の上階せし例しあり祠官は昔のまゝに紫を着し侍るにこそ先年水戸源義公へ我參廟熱田宮司紫袍を着する事を御尋ありしかば其故實を遊ばされ進せられしと聞え侍りしかども如何様の事なる子細は聞侍らざりし

或近臣に是を聞侍りしに恭願棄たの後御手づから認め置せ給ひしものは封の儘多く焼き侍りし其中にや有しといへり最惜まゐらすべき御事也伊勢の長官紫を用ひ侍る事は太神宮神祇和歌續

百首の自注に見えたり

○後魏の景明年中宣武帝の時、宣武帝海陸の貴冑先に居家單貧一且忽風雨錢を飛して其家に至る貧富鉅萬に至て其年宣武帝誅せらる宣武帝并州の林氏罷仕の後一日天丕て錢を雨す林氏天に仰ひていはく非常の事は必禍をなすとす速に止は林氏が福ならんと聲に應じて止

ひ後に富を保てり養神録此二年貪慾と知足とをいふのみ夫非常の事は必ず禍をなすといふもの人能理會すべし是怪異のみに非ず凡賤夫一旦名位に昇る單貪忽財利を得るがごとき世人大概これをうらやまざるはなし然して其終る所を見れば必らず禍に困しみ愁に死するもの古今萬々歟

○范文正公一書生が爲に薦福寺の碑を打せしめんとして一夕雷轟て其碑石を擊破せし事墨客揮犀及び昨非菴日記等に uitge 薄命の人の爲に是を説くべきかも

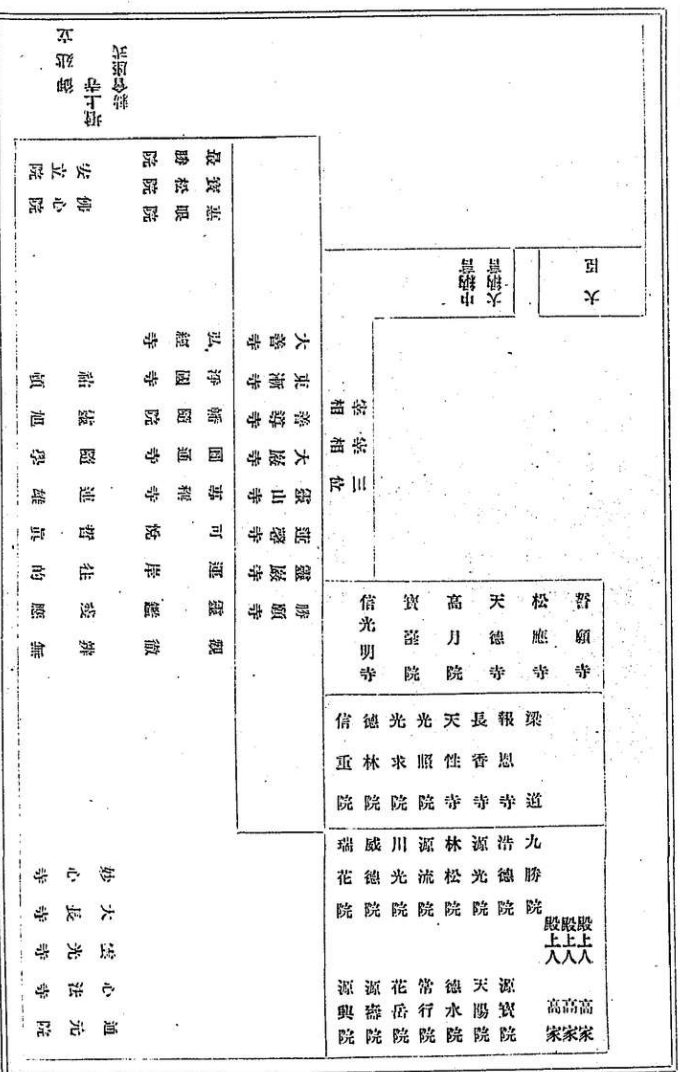
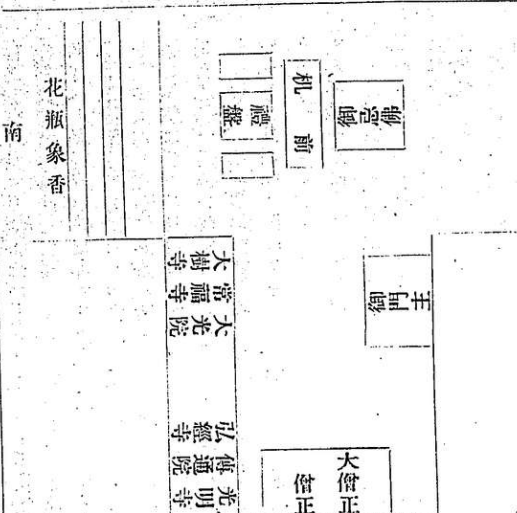
きかも

○宋の嘉祐中揚僧といひし人漢判官道に術士に遇て彼云く君世に瓦石を化して黄金とする者ある事を知れりやと就て僧これを試るに既に驗ありし術士此術を授くべしといひしに僧云吾は吏錄に従ふ何そ化金を事とせんやと術士曰子の志如斯吾及ぶ所に非ずと戸を出てゆく處を失せしよし宋書に見えたり嗚呼名位財利分に安んじ天に任せて蠶絲營謀せざる者世にまれなり故に名を追ひ位を求め財利を貪ること世人骨髓に入りて爲せざる所なし今の人豈術士の所爲を待へけんや敦るに爐火丹の術

頃日冬の新銀其品をよくせさせ給ふことに錢貴き事日々に甚し極月に入て錢九百餘文を以て銀十五兩に充異邦とまた錢の高下ありやといふ人あり予曰株宏の自智錄に錢の事ありたとへば百錢といへる所に銅錢百文を銀十分に準なるといひて不_レ論_スる所_ニ錢貴錢賤とあれば唐土とても時によりて貴賤ある事しるべし

或問文照院殿の御實母初日蓮宗にて葬し參らせられしが常憲公の命によりて東叡山に改葬ありし准
 後の宮御法命を改め授け參らせたまふと其法會如何と予曰頃日台家の僧に是を聞て靈會日鑑に記
 し奉りし長昌院殿贈從一位天岳光大姉寛文四年甲辰二月十八日
 逝御改葬の後御贈位の典ありし越智氏の御女とな
 ん去奏寶應二年二月十八日より五十回の御法會一萬部の御
 讀經ありし是文照院殿御遺命と云々

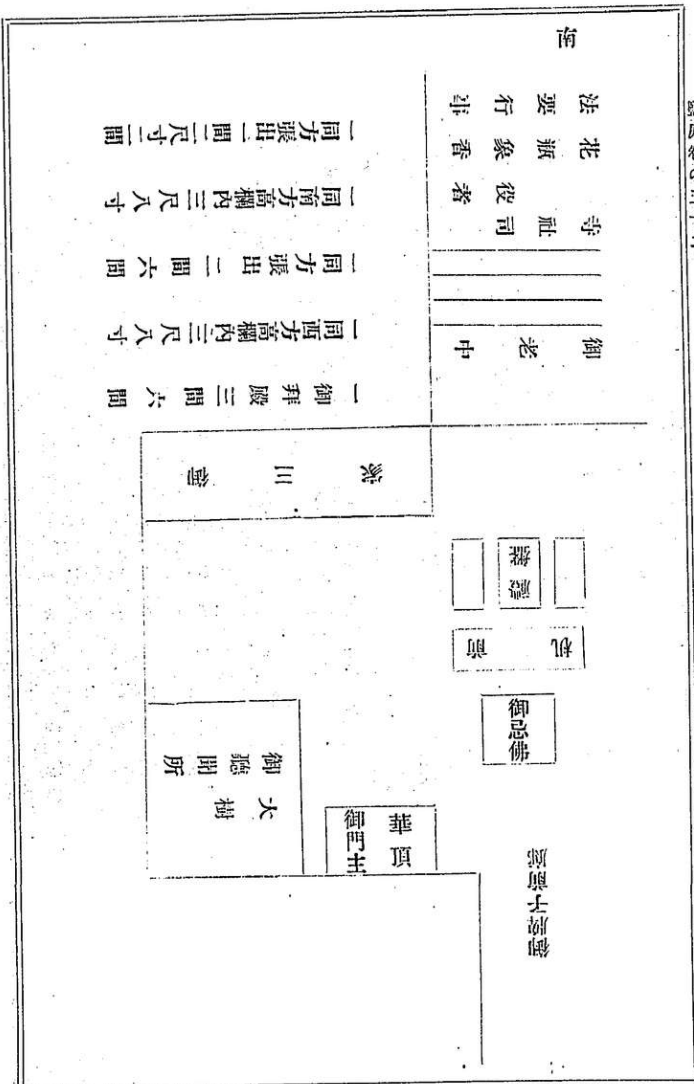
大僧正
靈洞
勅額は
仙洞震翰
十六日長澤壺岐守に令上
洛御贈官并勅額の御禮



[illegible]

大樹御參詣襲御衣冠御帶劔

十四日



十八日 智恨院宮連 勅使 院使御尋樂アリ
○正徳三年^{十四日} 文昭院贈正一位太政大臣御周忌
増上寺 勸會清揚院相國公御法會ノ式ニ同シ
但智恩院宮御下向なし時の貫首顯譽大僧正門主
に准せられたまひし

○或人曰凡亡者の靈に水手向るは佛法に效へるか
と接するに我國上久の習俗歟日本紀十六に鮎臣か
死せし時影媛哀傷の倭歌を詠して玉簪に飯盛玉腕
に水盛なんといひ其の非の時水漬みもろみな酒の
詞あり是我國佛法來らざる以前の事也

佛氏といへとも餓鬼の外佛菩薩等に水手向る事
なし今の俗は我先祖の靈を以て賤しき餓鬼とし
て祭る者多し思はざるの甚しきにあらすや釋氏
曰凡餓鬼は佛座に近付へからず幽林の靜所を拂
ひ昏時に水食を薦る事なり今佛殿の裏殊に朝晝
の間施鬼の祭をなす事其理なし鳩槃陀等の鬼類
すら殿堂に祭らざる事也^{御膳料木なき清淨の地によつて}況饑鬼を
や法なき僧は人の祖先修行めたくして終り且
は智識火下せし神靈をも皆はかなく罪深き者と
同しやうに施食すあさましされは追善の法事に

施食をなすは寒林の餓鬼迷魂をまつり拔苦與樂
の大慈悲心に任し其福力を以て今日靈靈の増進
佛果を祈る事也賤しくも其靈を直に鬼類にして
侍するにあらずといへり施食の法は密家ことに
深き習ひあり禪者の施食も亦理に近しとかや
○昔唐土人天竺へ渡りしはいと艱難にして容易なら
ざりし義律三藏の經を取に題せし詩にも去人成
百歸辨^十後者安知^一前者難^一なといへり今時は印
度に往人毎に多し旅驛の通路も安らかなりとかや
二十年計り前迄長崎に在し商人^{饑饉}ともろこしに
わたり夫より天竺に往とて彼國の事ともかたりし
とそ靈鷲山へも上りしがいと高き山にて山上石垣
をめぐらしたるめり其石苔にふりながら石のあは
せめひするさ侍らざりしなといひしとかや
○或曰古き織物のきれに千里切といふありこれは昔
大江千里^{五位下}唐土人を招て色々の物織せし其殘
餘なりといふ久しき物にこそ此頃^{壬辰}難波人我府
下に來りて古き織物を尋ねて買求めし僅二尺にた
らぬ程の物を三貫匁にも買しとかや好事の婦人奇
をてらひて

○瘍醫外科の探札（探札、探針也、今の観音） 白描（白描なり） 輕籠（輕籠也、馬）

便面（便面、是亦、鏡等の占なり） 雪液（雪液也） 柿脯（柿脯、和に云く、和に云く）

○詩に首如飛蓬といへるをよき事と思へるは非なり蓬草子とて葉はなてしこの如く花は野さくのひらがさるかことし其實は後に絮となりて飛散る河原に多き草也（和名、よき草は艾の字也）

○膽吹山其麓春照といふ里にて民家もくさるをうる古歌に詠せしは此處といふ亦下野國日光山の下標地原の艾をよしといふも古歌故にや

○五月五日一百種草を采ること異邦の書（本草、陳藏古し） へよりあり我國百草といふ事世人多くしれり昔より采事かといふ人あり曰日本推古天皇十九年五月五日大和國菟田野にして藥獵したまふといふ事あり是を始めてやすへき

○五色線云謝靈運遊山觀（掛猿下飯百臂相連） 云々世に猿の手をとりつらなり下りて月影を取らんとするさまをえかくはかゝる故事にや但し月を取らんとする事は經律異相にてや見侍りし相連り下る故事とは別なり然るをひとつに心得て圖し侍るに

元大法師都天教主とのたまへるも無下の事にや數量文字多き名古今ためしもなくや侍るは皆道士黃冠の號に隨ひ生を貪り死をおそて虚誕の禪祠枉惑の兒戯に似たるにや壽福は命あり豈祈りて是を得べきや甚哉唐宋の愚主嗚呼

○夏日和峯上人示レ上綺筵二律
獨遊夏畦忘去就 月幽風淡一茅亭
閑々荷露投珠潔 冉冉松烟捲翠隳
夜笛覺孤林睡鳥 破窓伴數點飛螢
梅霖洗曉雲山線 江潤不淺憶楚萍

○山城國水瀨近き櫻井の里は前羽林橘正成朝臣楠京より兵庫へ下られし時其子正行に教訓して此里より故郷に歸されし事人傳へ侍る亦西行のうたとて野翁の口碑に

これは浮ちらねば底にかけうつる
春おもしろさくら井の里
集には見えされとも春おもしろさといひし餘情西行のよめるすがたといふへし凡所々に傳ふる古歌は其歌人の當座に讀すてし事くさなればあながち集になきといふかり侍るまじき事なりと或堂上

○大和國世尊寺の本尊は我國木像の始なる由（元亨釋書） 唐玄宗の時長安東都兩宮の官女殆四萬人とかや古今掖庭の盛なる是に過たるはあらじ（五雜、嗚呼宮中の婦人の員すら萬を以て數ふ其文武の官人さこそ多かりなん開元の始天下静なりし玄宗此富貴の極に居て驕り且惑へる宜ならずや今僅に一家の富ある者其心はからかにして嬌酒に惑へり況や四海を掌にせられし人をや承通繼玄昭明三光弟子南嶽上真人と十五字の號も玄宗の自稱也（會昌撰）

按するに玉京金闕七寶元臺紫微上宮靈寶至真玉宸明皇天道君といふ號は宋の徽宗に群臣諂ひて奉りし尊號（世三、字の中玉と號し） 徽宗又上章青詞の自稱に奉行玉清神霄保仙元一六陽三五瓊璣七九飛

○國の枕詞あり眞杉小靈國槻根生山背國此類は昔し材木を採りし山ありし故の稱也されば山城國貴船神社も屋船久々乃知の神を祭る是樹木の靈にして材木をとる山口木の本の御神也或人曰さふねとは木生嶺にして佳木繁生する山嶺といふ事也とさも有べきにや（世人船の字になつむ）

○寶永七年八月水戸中納言綱條卿より禮儀類典五百卷を大樹公へ獻したまふこれは故中納言光圀卿承應三年御撰の書と聞えし

家かたり給ひし

○國の枕詞あり眞杉小靈國槻根生山背國此類は昔し材木を採りし山ありし故の稱也されば山城國貴船神社も屋船久々乃知の神を祭る是樹木の靈にして材木をとる山口木の本の御神也或人曰さふねとは木生嶺にして佳木繁生する山嶺といふ事也とさも有べきにや（世人船の字になつむ）

○寶永七年八月水戸中納言綱條卿より禮儀類典五百卷を大樹公へ獻したまふこれは故中納言光圀卿承應三年御撰の書と聞えし

○國の枕詞あり眞杉小靈國槻根生山背國此類は昔し材木を採りし山ありし故の稱也されば山城國貴船神社も屋船久々乃知の神を祭る是樹木の靈にして材木をとる山口木の本の御神也或人曰さふねとは木生嶺にして佳木繁生する山嶺といふ事也とさも有べきにや（世人船の字になつむ）

○寶永七年八月水戸中納言綱條卿より禮儀類典五百卷を大樹公へ獻したまふこれは故中納言光圀卿承應三年御撰の書と聞えし

○國の枕詞あり眞杉小靈國槻根生山背國此類は昔し材木を採りし山ありし故の稱也されば山城國貴船神社も屋船久々乃知の神を祭る是樹木の靈にして材木をとる山口木の本の御神也或人曰さふねとは木生嶺にして佳木繁生する山嶺といふ事也とさも有べきにや（世人船の字になつむ）

○尾南略圖



鹽尻卷之五十三 正徳

太田道灌辭世の事 癸巳小田原高浪
尾府堀川へ堅魚來りし事 蛟柱
雪隠の稱 高廉王は日本の犬
五枝松 甲午三月日色如血
衣笠大臣木曾梯の哥 玉川和歌に詠るは
武藏の名處 熊谷蓮生の哥
伊勢の小町塚 尾州石枕の里
定家卿幼時の歌 熊野浦のからすみ
和田峠の星くそ 尾州大國靈神社の祭
畜生三種あり 堀川夜討の年月
親戀の歌 瀧川家宸筆の色紙
いなめしのゝめ 望火樓
たこめね 時頼道灌のうた
楓 諸社神官の稱呼
和州招提寺 牛頭天王梵語
諸天明王 温泉涌出地祭神
菅三品奏狀 傀儡俊頼の哥を誦ふ事
柊桐島 日向國宇土の岩屋

智鋒師新板二番 昔皇都大學寮
康熙帝永世の祝 賈誼上疏云天下大器
五葉主五穀 二根ある馬
謝仙火 開元錢新舊
漢書食貨志 巫蠱左道の邪術
宋熙寧中甘露降し事 水仙花
常麻の變相 願生淨土七祖
蓮池四本寺 料簡
堀川院崩御 文屋康秀か哥
清水池 なぎなた
志水氏 弓削氏
西山義九所壇林 關東壇林十八所
多越善導流義 朝臣
信長桶迫間衝入の路 珠數の梵語
今世の駕籠 安東順時の系圖
神君御花押 佛者本尊を立て拜す
荒神供 摩利支天の像の事
不空罽索觀音千手觀音 地藏右手錫杖を執
大黒天 辨才天

○康正元年の冬藤澤の役にいたり敵も味方も入交り三日をかさねいとみあらず事になりぬされども屋形の武威強して北條憲定も終に自害して餘兵のかすあまたにあたりてかたみに死するを破りて藤澤の方の松原の群にて戦ふ男有しに味方中村治部少輔藤原重頼とて京家の人の世にしつみて屋形に扶持せられ侍りしになん敵の男は栗毛なる駒に乗りて二ッ引染のほり龍の紋付けたるさし物なりけり遠目ながら鐵風いかめしく見えけるしはし戦ふ鎗もあはせしに目の前に彼男つきとめられ頼て中村手つから首を取て我陣に來りてかう／＼なんと語りけるにまた壯年にたらぬ男の色白うして誰にかにるべき心地して鬚のあたりたゝならずたさしめつゝあはれもいやまし仇なからにくからぬ面影也中村重頼此心はへのやさしさにうたひとつ物して手向にとすゝめ侍ければ其首に向ひかゝる時さこそ命のをしからめかねてなき身と思ひしらすは重頼返しなき身とはたれもしれとも諸ともに

今はおよふ事をしそおもふ右太田道灌詠草幕景集に見えたりかゝるうたを道灌の辭世なりといふあやまりなり○正徳三年癸巳五月十八日相州小田原俄に高浪漲り來りて濱をひたしけるに大なる鐵炮を打上げし北條家の古物とかや跡なりし○同しき年六月十八日尾府下堀川へ鯉魚おひたし來りしを人あつまりて取上げし前々にも鯉魚の此處迄來りし事聞侍らす漁者云日てり久敷時鯉内海に入諸魚を追て濱近く來る此處のかつをもかゝる故にやされ共沖中鯉も見え侍らす或頃日はしかを多く船に積來る其奥に附しかともいへり○同七月末府城南門の左右は御園御門の堀より所々より煙のことく立のほりたるもの有圍一丈斗長さ四五丈もや有なん柱など立たるやうに薄曇りて夕附日にうつろひ色異様に見えし人を立より能見れは蚊幾百億ともなくあつまりて此かたちをなせし蚊柱といふべきにやいかさま希有の事とかたりしか廿六日邦君隠れさせたまへりとなん廿九日に聞

ゆ扱はかゝる事の先兆にやといふ人多かりし○厠を雲隠といふは雪竇山の明覺禪師雪隠寺の司厠有しより呼けるとぞ○朝鮮平安城より一里計外に麗奴といふ所有河邊岩石多し二丈ばかりの大石面に高麗王は日本夫也と彫刻せり其文大さ一尺計よく切入たりと月川肥後彼地にて親しく見しと云々○墓上に植し松を五枝松とて五株うえ侍る故實とかや我國ふるさすがたなるべし古塚に松のむらゝゝあるは問々あり○正徳四年甲午三月十七日より十九日迄朝暮日色血のごとくに光耀なかりし月もまた赤銅鏡のごとくにて光なき夜のけしき他に似たり人あやしみ街に語る昔も有やと問ふ人あり予曰遠き記録にもありや覺えず慶長十九年甲子春朝日如銅と神君の御年譜にしるさせたまひしか此冬難波役此年五月子三月數日の間月色紅のごとく光なかりし此年五月二日洪水古へかゝる時なんといやけく御祈侍りしか今はさる事も侍らざるにやと思ひしに同月廿三日より一七日の間熱田の御社にて御禊可仕よし女

房の奉書にて内藏權頭河に仰事侍りしかは丹誠を致し卯月三日御撫物並大座を朝廷へ捧け參らせける上弦のころより月光をまして空の氣色も靜になん成侍る○本會にて所にいひつたへ侍る衣笠大臣のうたとて人のかたりし生すかふ木々の梢を蜘蛛手にてちらぬ花ふむ木會のかけはし○玉川和歌によめるは山城攝津近江武藏陸奥紀伊同し名の處をも亦よみ來れる言葉あり名所にして古歌なきは緒絶小田江と非難りあしや玉の井是尾張今よますとかや又鼓島は隱岐國なるは紀の輔時のうた拾遺集に見ゆ伊勢國なるは鴨長明か歌われ共狂歌に近ければ勅撰に入らずたとひ古人の歌有とも撰集に入ざるは遠慮あるべきよし或堂上家の人いへり○角田川近き處に淺茅原あり名も雅なれと古歌にはなし對馬國安佐治山は知家の歌新勅撰に見ゆあさち原まといふ黒髪とよめるは名處にはあらずまた武

蔵に名所あまた見ゆ

忍川下谷 白糸瀧橋田 櫻川芝 別の淵三股 俵の

橋牛込 鏡池淺茅

なんと名もくちおしからねど古歌にはよみし例なし井には堀兼井の外野中の井谷中龜の井小石柳の井の門なんと侍れども歌枕ならず小石川の古歌によめる吾妻川なんと今の名所也荒瀬崎はその處分明ならず或人云神奈川の浦をいふと云々霞關は今安藝族館の邊也みよしのさとは川越に有隅田川は下總の名處に入て行基法師のうたに

まつち山夕越くれていは崎の

すみた川原にひとりかもねん

とよめるは武藏國なり但待乳山淺草なる金龍山なりといひつたへぬれば此山武州の分組伊國待乳山に在實卿の哥は武藏野はすべての名なれどもわきて城西中野にして武藏野と呼地侍るとかや堀かねの井も其邊近き里の名に傳はる但し堀兼の井は牛込に有よしいにしへより申つたへし内我外山の御館に其名有○熊谷入道進生高野山智識院に住める時讀る歌いにしへのよろひにまさる紙衣

風の射る矢も通らざりけ理

紙衣とは紙子にあらす白紙をつきて衣とす今二月堂の行者等着せる處の紙衣これ也

○伊勢へ参りし人云松坂と櫛田との間左の方に小町塚あり路數町騎たり土俗云小町は男と交らずして死す後に此塚蘭三莖を生ず人取て田にうへしより繁茂す今席を織て太神宮に貢すとかや又其邊に長田小町塚といふもの國々にあり我尾西彩屋村にもあり

○尾張國石枕の里昔東國に通ふ路なりしに驛舎の老婆に旅人やとりにつけば臥所の下に石の枕をかくし置て寝入し頃其枕にあてゝ打殺し物を取屍をば埋みなんとする事年有しか彼老婆惡死してその靈たゝりければ里人祝祀りて祠を立しを後稻荷と呼で一村の産神と崇むといひつたへし

○定家卿幼童の時乳母に抱かれて有しをめのと云く俊成卿は歌よみと世にいふ君も歌よみたまへわれに馬に乘行人あり是は如何といひ侍りしを

管笠を着たるおとこの馬にのり川のむかひを通るなりけり



雲々

是色とらす有のまゝなるすかたにしていとけなき心から何となくいひ給ひし和哥の本意にや後迄我管笠をの哥はと實は終に讀侍らすと宣ひしとかや○熊野浦にからすみといふ物あり土にあらす石に非すゝりにてすれば墨のことし色はつやゝかならず書眉石の類か

からすみ浦人波につれてよるをひろひてうると云々

○水曾路和田峠にある星くそといふは黒水晶の類歟

○尾張國大國靈神社五月六日の祭を梅華無盡藏に正月の追儺とひとつ事のやうに記せしは傳聞の謬にや今彼祠官に問處先 應 戸の襷

五前口露同先露 一献 二献 三献 ナリ

北五前口露同三献 賜

戸土器を初神主に賜ふ神主のみて酬す次權同次に中職是は不酬次に泰幣二本次に戸馬上ひかはき弓矢を帶先馬場清淨衣門にて下馬神前の西半町計威徳院門前に於て東に向ひ鳴弦三度次に祭終て上馬すみて神人の次に里人の走馬は國戸を左に祭る社外に開さる歟

○青生に水魚林鳥野獸の三種有て其類無量なり棲炭經に魚に六千四百種鳥に四千五百種獸に二千四百種有とかや予具を集しに凡三百四十餘種ありし猶國により濱によりしらぬ貝いくらもありぬへし其魚の類を多かるへし

○土佐房昌俊義經を襲し堀河夜討は文治元年十月十七日の夜子刻と百練抄に見ゆ

○玉葉集に

おはたゝの板田の橋のとたえしを

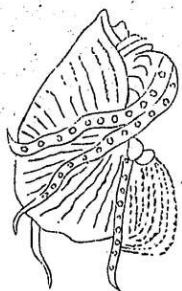
ふみ直してもわたる吾かな

親鸞の哥也集に縁信これは二條院讀股源三依知るよしの事に付鎌倉へ訟へ本意の如くなりて上りける時讀て送られけるとそ

○昔我瑞公御康存の時瀧川某家へ立入らせ給ひしに主家に傳へし宸筆の色紙を懸置しを御茶道家山本何某先立参り見てあるしへ此懸物取收め宸筆ある上段へは君あからせましまさすとて外の懸物懸させけり實に天子を恐れ敬ひたまふ御事如此そあるへき

○いなめめ萬葉なりしのみ同上稻のみへみへの切篠のみへといふ事にして明渡るそらおほろは曉より又後の事夜の明るをいふあやなしやみはあやなく吹そと云無益の字也かいなしといふ同じ風すさむいふ風ふきさすさむは風ふきやおほあらしの杜の下草生ぬれば駒もすさめすかる人もなし此うたのことはにてしるへしすさめは愛せざる也すさめすやとる秋の月の月是不捨心にして餘所にせざるをいふ
ちりのまかひ花のちりありなめめあらしなり時鳥なかな鳴を調ても我とはなしに非俗にいふなぞといふと秋にはあへず不致にはあはへなきなきいふむつかりたまふふもやさしはつしははやくしきなつさひ別むつかる也勸常かたそ谷のけはしたをうふる女はさふ細道也やた玉に出

いなしさ田舎にいまつらかさ雲途にいしまひね霞こつみ洪水になかはつ木いのをいさなみ霧さはひこす霜しつり水より落る
○西溪叢語曰東京高處有望火樓上有人探望下屯軍百人及桶節鉤鋸斧梯索之每遇生發撲救云々我東都火の見やぐらを設く異邦望火樓也
○蠻國の醫書圖の内に見ゆ貝の類にて章魚なり我國西方にてたこふねといふこれ也



○最明寺入道のうたに
いくたひか思ひさためてかはるらん
たのむましきは我こゝろなり
いきて世に今日そと思ふおもひ出も
なくてやはてんよしこれも夢

○楓は郭璞云白楊に似て葉圓にして岐あり脂り香はしといへり又寫書には樹大にして葉三角なりといふ我國古書にはかつらと和訓す中世以來かいての紅葉に此字を用ゆるは似たるを以てなり予東都にて楓を見し圖のこし紅葉愛へし葉かしはのことく岐とがらすざれとも大方一物と覺え侍る



○諸社の神官の稱呼久し東鑑に諸社の神官神人云々日本後紀大同二年の條下に曰或有任神長事幸通例其有官符任神長者宜改爲神主云々此ころはひは神長と呼しを勅して神主と稱せさせたまふと見えたり伊勢の一禰宜を長官と呼も昔の神長の遺習なるにや

但し長官次官はカミヌカをいへは一の禰宜をかみの意にて長官と稱する歟
○帝宮より始太神宮の代々の造替且衰世の運に依て古代のすかたならぬ事多しとを然るに和州招提寺は孝謙帝の御願天平寶字三年己亥創建今正徳四年甲午に至りて九百五十六年幸にして一度の炎上もなく作りもかへす其儘にて類なき古代の梵刹也今寺額三首石
○牛頭天王の梵語梵語梵宗の世に多く知る者なし
○招摩揭唎婆耶提婆囉惹
○招摩は半の梵語揭唎婆耶は頭の梵語提婆は天囉惹は王なり
○凡諸天明王等はもと天竺國の所祭釋迦佛出世已前より唐土天地山川の祭往昔よりありて帝王の主とりたまふか如し
○武間我國溫泉湧出の地必らず神をまつりて鎮とす異邦にもかゝるにやと曰三奏記云驪山の溫泉は舊説以三牲祭乃得之云々我國溫泉の事宿奈差那神に初まる大分速見湯といふ事神記に見えたり
○營三品奏狀曰初拜内史之時奉仕五畿七道神位記事名號階級之誤獨自所考正二千余坐其三千六百

余者文時手書也云々本朝女粹
神社の謬傳故實の違背猶ありし後世區々として
是を考へ正さんとす難哉

○富家の入道殿に俊頼朝臣さふらひける日堺の傀儡
ともまゐりて謳つかふまつりけるにかみ歌になり
て

「よの中はうき身にそへる影なれや思ひすつれとは
なれさりけり」と此歌を諷ふたりければ俊頼いた
り「にけりとてゐたりけるなんいみしかりし永
縁僧正此事を傳へ聞てうらやみて琵琶法師其にか
たらひさま」物杯とらせて我詠たるいつも初音
の心地こそすれといふ歌をこゝかしこにてうたわ
せければ時の人有かたきさき人となんいひける敦
頼入道も是をうらやみたくや思ひけん物はとらせ
すして盲目ともにせめてうたはせ世人に笑はれけ
るとそ長明無

俊頼の歌を諷ふしは人より稱し永縁は自衛ひ敦
頼はいやし同じ事もしなし有今の世稱譽ある人
の心根をしらは賢否邪正自可顯
○或人云朝鮮よりの舟路對馬壹岐を歴て九州所々に

かよふ昔神代新羅より直に日向に舶着せしやうに
見えたり今とたかひぬるにやと予曰人に聞しは其
州の海中に相欄島といふあり毎年韓地よりひよと
り千萬となくわたるひりよの其後應陰りて打つゝ
き薄雲覆ふ事あり國人應來るへしといふに必應多
く韓地より飛渡るといへり是を以て見るに韓より
日向のかた風氣も通し侍るにや神代の昔のすかた
も思合られ侍らすや

○日向國宇土の岩屋はうかやふきあはせすの尊降誕
の處とかや濱邊より無下に近き山きはにていはや
入口の凡そ二十間計深き事十四五間上へは岩一枚
にて天井のことし窟中三祠をまつり御あかし立て
いと神さひたり其岩屋の奥に龍宮穴とて數尺
計の穴あり立よれば風甚しく吹出して物すこしと
見し人かたれり日隅薩の三州はもと一國にして共
に日向の國と呼し神代卷古事多く殘り聞え侍る

○最勝佛頂陀羅尼淨除業障經本地垂迹三藏の經十善業道
經經又難

○昔皇都大學寮に先聖孔子先師顏子九哲の影を崇て二
右二本維摩院の僧正智録此頃新に板に刻せし

○賈誼上疏云天下大器也今人之置器置諸安所則
安置諸危所危天下之情與器亡以異

賢君は仁義禮智を以てし暴主は法令刑罰を事
とせり其措置の安危德澤の絶亡禍福のかゝる所
豈小縁ならんや

○五葉主五穀五穀東方朔欲知五穀之收否但看五葉
之盛衰

李主三小豆杏主三小麥桃主三小麥栗主三稻

○人男女の二根を具するあり獸もかゝる物ありやと
いふ人侍る予が采地愛知郡民の家に二根ある馬あ
りて時々物を駄して來る見るにいとるさく覺え
侍る

○或家に謝仙火の三字を書て柱に粘ありこれ何の勝
ぞといふ人ありこれを雷書といふ宋の大中祥符中
に雷王眞宮に靈して災せりたまゝ一柱焼すして
此字あり好事傳へて鎮火辟疫の符とせり火の字の意
謝仙は雷部中の鬼の名主行火云々かゝる事大樂
道家の術歟

○開元錢に新舊あり舊は唐の高祖の武徳の禱新は武

仲の釋典めでたく行はれしやうに延喜式に見えし
六十余州の國學にても各春秋の禮をつしめり衰
世に及び學絶えて後國人其名もしらす我尾州の如き
村に學校ありし
に昔中島郡國
村に學校ありし野州足利の學舎の外孔聖を安置する
所も聞えざりしが我敬公獨古禮を興したまひ城門
に聖堂を建て釋菜を爲せ給ひし猶亦東都林氏の宅
地に就て大成殿を建てたまひしより二仲の祭も
年々あり常憲院贈大相國の御治世元龜四年神田の地
を以て昌平阪と號し新に大成殿を再建せしませし
かば釋奠の姿もや古へにかへりぬ亦近き頃肥州
長崎の吏其家に聖位をもふけてまつられしを寶永
七年庚寅佐久間安藝守平信就官に告て新に聖堂を
營して孔子以下の神位専ら明朝の製に效て本主を
安置し春秋の祭其禮あり其傍に學舎を建て毎に書
を講せしむ向井元成は
を訓とれりもろこし人も時々參て拜禮す
るとかや是太平の化也

○今大清康熙五十三年也帝法令を玉展下し三年の間
十五省の年貢其年を減する是在世の永きを祝せら
れ侍るとかや實にいにしへより一主五十年にあま
れるは其例し少なく侍るにや

宗の會昌に禱る新開元の背文に京洛揚益等の字あるは其鑄し所に各一字を以表す亦早痕有ものは舊開元也

甲痕は寶太后と文德皇后の兩説あり共に不知之按するに開元錢は初武德年中より唐三百年相續て治鑄せしと見ゆ詳なり我國寛永錢の如し寛永の始より至今日而以同文字鑄之耳

○漢書食貨志一夫挾五口云々食人月一石半五人終歲爲粟九十石云々

漢の時一日の食粟五升とす我國今武家の月待一人食玄米五合也或曰是豊臣秀吉公の定むる處女は其半を用ゆる古今の計量の大小不同也以此類今を疑事なけれ

○異邦巫蠱左道の邪術いにしへより多し巫蠱我國にい蛇蠱とらひ蠱神或は鳴童預拔神我國にいふの類數ふるにいとまなし續夷堅志に少童をぬすみかくし日々に食を減じ法酢を灌ぎ其死を待て枯骨を收其魂魄を拘す他の事を聞くと欲する時は耳邊に於て其事を報ずといへり癸未續識にも又此事を筆し蠱家人を慘酷せしさまをいへり蠱耕集にも蠱家童男女

を捉へ符命法水咒語を語らひ迷惑せしめ活ながら鼻口唇舌尖耳衆眼を割央して其活氣を取腹胸を破り心肝を割て各小塊とし曝乾搗羅て末とし收裏して五色の綵帛を用ひ生魂頭髮と同じく相結び紙を以て人形様を作り符水をして咒遣し人家に往て怪をなし廣く他の財物を持し事を記せし嗚呼は一箇の邪術財寶を貪り得るが爲かゝる慘毒の惡業をなし其終りは國家の爲に極刑に償ふ類問々聞え侍る我國白狐大神等の邪術も其意殆同じ畏れ避て可也

○宋徽寧六年の冬建昌軍城北五里の間甘露松上降りしとして人々瑞とす濃厚酒の如く其味甜く香し依て松枝を折て太守張氏に獻じ尋て上聞に及びし鳳凰山中を過る時牧童等見て此山上にも亦甘露ありとて玩弄す賣藥の者あり人に語て曰太守の不察のみ何物を甘露とせん露落て數畝の間にのみ偏からんやといへり見ゆ凡樹木の精液外にもれて此物となる古しへより甘露を受しといへる木必枯然れは天瑞にあらず人主みたりは是を以て賀するは愚といふべし松に異花をひらく等も又木の疾といふ

へきのみ

○唐土人は梅の弟とこそいへ我國の水仙花は大方神無月より見侍る潔色に類なく霜雪の中獨觀とするにたれり

○當麻の變相中央彌陀の印相は他受用報身說法斷斷の相也西山一流の印には三佛の身相印の印と習也

此印相は報身花嚴說法の秘印也密家の佛の大本師とせり花嚴經華嚴の大疏の意彌陀を以て華嚴の教主とし且諸報身者眞智所成故名法身矣云々花嚴大疏第七

淨土所談の彌陀報身は普通三身門の外別に四十八願酬因の報身報土と習大乗同性經に西方安樂阿彌陀佛は是報身報土と云々

○願生淨土七祖言水の相承にあらず佛祖統化七

- 始祖 唐山正覺圓悟大師
- 二祖 長安光明善導淨業大師
- 三祖 南岳般舟承遠大師
- 四祖 長安五會法照禪師
- 五祖 漸定臺若少康大師

六祖 永明知覺延壽禪師

七祖 照慶圓淨法師

淨土立教志の相承如此智旭師の宗傳竊議に此七祖に雲棲和尚を加へて八祖とせり然らば亦旭師を以て第九祖と可仰もの也

八祖 雲棲株宏蓮池大士

九祖 雲峰萬益始日大師

○蓮池四ヶ本寺

花頂千七百三 黒谷百三
百萬遍三十 淨花五十

及び増上講寺は一萬他に異なる進藍鎌倉光明寺は十萬坂東一派の古刹

筑紫善導寺は五百九州一派の本寺也 此外五ヶの無本寺京都にあり

讃州百相法然寺三百 江州本部錦織寺二十

洛西嵯峨清涼寺七十 泉州堺旭蓮社四十

尾州名古屋建中寺五百

此等は鎮西派の寺院也

○料簡 法花文句補任料理也量也簡與諫同即量裁選擇之義といへり今俗丁簡と書は非也

○堀川院崩御嘉永二年七月十九日世に疑ひ有初僧仁寛輔仁親王を立まゐらせんと謀り己が青童を女房に作りなし密に主上を弑し奉らんとせしか事あらはれて仁寛も伊豆國へ流罪せらる我中島郡萬壽寺の觀望禪師に此事あり盛衰記にも見えたり仁寛はおそろしき者にて至尊をうかがひ奉りしに時の廷臣罪を正し死刑に處すべきを流せしはいひかひなく侍る但し輔仁親王へ憚らせまじませし御事も有しにや其後餘黨終に弑し奉りしやうに世に云けるとかや仁寛東國にて不法甚しく武州立川陰陽師と議して一流の行法書籍等を作れり是所謂立川邪流なり

○文屋康秀が吹からにのうた秋の草木と定家卿の改られし百人一首を書時は秋の草木と書短尺なんと書には野邊の草木と書へしとぞ

○太平清記云清水池在儋州城東其中四季荷花不絶臘月光盛

○ナキナタは長刀の轉語といへり實は薙欽也日本紀廿七欽をナタと訓す

○志水氏は菅原の姓にして右大將頼朝に近仕し男山八幡宮例幣使を勤めし其裔中世に至り八幡山下清

○三州淨土宗西山壇林三所山中法藏寺岩津妙心寺中島崇福寺尾州西山壇林三所飛保曼茶羅寺都田祐福寺熱田正覺寺紀州同流壇林掛取惣持寺京師二所禪林寺光明寺を合せて西山義九所也

○淨土宗關東壇林十八所

光明寺鎌倉 壽經寺小石川 増上寺芝
勝願寺鶴巻 常福寺水運 弘經寺飯沼
大巖寺生賀 蓮馨寺川越 弘經寺結城
東漸寺小園 淨國寺岩盤 大善寺龍山
大念寺江戸 大光院新田 幡隨院神田

善導寺諸林

靈岩寺

靈山寺湯島

○名越善導流義壇林二所圓通寺大澤專林寺山崎廬山流義大阿彌陀經寺吳州堺開祖大乘澄圓菩薩院勸修寺源義氏の裔孫泉州刺史義貞の男初は鎌倉光明寺常譽上人の淨土宗を傳ふ自此先後に元朝に入て廬山東林寺の優曇普度大師に見え惠遠の法脈を繼ぎ廬山義淨土宗をひらく

○官位問答に曰昔は六位のものも姓について朝臣と書しかと後鳥羽院より後は禁制なり其比まては五位にも堅く制せらるゝと云々

○今川義元我東尾を略せられし時織田信長熱田の宮に詣し夫より春教門を出蛇塚を経て井戸田に行山崎より野並にかゝり古鳴海を過りて太子根に陣し給ひし是より桶迫間に衝入て勝利を得たまひしと云々此路すも田島家の傳ふる物なり也

○珠數の梵語鉢塞莫といふまた南蠻契利志當は念珠を毘塔子といふよし

○今の世貴人より下つかた親籠とて乗侍るは根本簾與より起れりあおた或あんた露ひなき物也後はむしろにてかりに目おほひなんとせしよりさまゝの

制出來りぬ初は卑凡の者道路の勞れに乗りてありきしを今は大人といへとも是をめす但し今の制のごときばかりより變して簾輿と取交へしと見ゆされは乗物と親籠と今格別のやうになれり

○安東氏譜を按するに神武天皇御宇長髓彦が兄安日東國にのかれ陸奥濱安東浦に住せし齊明帝の時蝦夷叛けり安倍比羅夫に勅して是を征せしむ比羅夫陸奥に至るこゝに安日か裔安東と云しもの官軍に屬し軍功を立依て阿部陸奥臣の姓戸を賜ひ賊を護せしむ其後裔致東よく國亂を鎮す將軍の號あり仁明帝の時柴田郡大領外從六位下勳七等阿部陸奥臣豐主等漸盛大也一條院の時彼後胤國東松前に至て賊を征す其子頻良其子を安東太郎頼良といふ後源頼義の名をさけて頼時と稱せし自安東將軍と名謁と云々

一作安部將軍

○忠頼安東 頻良 — 頼安大夫六郎
為元赤村介 僧良昭

○佛者本尊を立て拜する事釋迦の如きは先師の形像をわかつて其徳を謝する意也其他佛菩薩等の像の如きはもと無形の徳を表して其象を取て造りし事故に諸佛菩薩を拜する事先道場觀とて其依法正法を觀し或は其三摩耶形且種子を觀する事定めり顯密傳法の僧の外は此等をしらす今禪淨土日蓮宗なんと僧に佛像の印なんと問見よ何事たるを辨えざる法師多かるへし

○或問荒神供密家の正法になきより谷響集に記せり然るに真言宗の僧正法の荒神供ありといへり如何答されは谷響にいへる所は世俗靈神として祭る荒神の事をいへり是は倭俗作り出せし事にて唐道家習合の邪法なる由をいへり瑜義經等にいへる毘那耶伽毘那耶伽の本身障礙神を一に荒神と稱す是に忿怒と如來との二像あり一切法の障礙となる神故修法の時先降伏する事密家の大事也是靈神にあらず其本地金剛薩埵と習ふ故也是をまつるを荒神供といふ是は密家傳來の正法なりと云々但荒神と云號唐になし我國あらふる神といふ事を荒神と呼○摩利支天の像今世に見る像は大威徳明王を一面に

○地蔵右手錫杖を執しむるも小野廣澤兩流の軌形に
あらず右は施無畏の印也
或寶幡を持せしむる三摩耶形なれば也
○大黒天神頭に帽を蒙り右の手槌印左手瓔を執る
姿にあはれ蓮に作りたげらるるにせ日本もの頭巾を
穿て荷葉に乗せしむる姿やうの服を着せしむ非也
○辨才天は右手金日本の祓のの祓の左手印章を執れり寶珠に
非なり

鹽尻卷之五十四 正徳

孔顔の樂

老て少龜

鶴龜

狐鼠の進退

藝を衒ひて利祿を求

錢を料足と呼

講の字義

異を好み奇を衒ふ

園城寺長吏山門座主御附弟とならせ給ふ事

大和入道見佛か歌

三井道顯僧都

尾府下正月初三後の心竹 初春望夜燈

兼好か書る見苦しき物

殯葬

知恩院御忌

長良兼良の訓

善廣院將軍童の時

郁離子

菅公自書の太政官府

百十番の謠の注

周易の訓

ト部家神離の傳

瓢より駒を出す繪

吸酢の圖の事

雪中芭蕉

佛者右膝着地

景清か伯父の僧

大燈國師

猿くつわ

鵲樺來唇

梔脫丘 驢年犬日

水中鹽味

細川頼之退隱の詩

幽岩律師

萬國掌葉圖

いらたかの數珠

寺院に瘡かくる事

比叡山の如法經

不動明王四臂の像

日蓮宗に安する愛染明王

地下二位三位叙するとも なるみかたの歌

東南院の宮

我國印本の紙

京より諸家へ召抱らるゝ妾 斷邪顯正論破文

とぶ火

信庸朝臣の歌

仕者入治朝

欲貴之心

寒士の妻

尺蠖穿堤

熱田の菩薩號

同本異譯の經

世界

衲衣

大原三寂

女性小性御料人等の稱

常徳院將軍の女

人身十神

眞言五部秘經

三大部

天台五小部

はとけの訓

沙門桑門

書物を本といふ事

枳棋

馬駒駢馳

寒國の馬

馬の種類

豆州にて殺す異獸

○程子云周茂叔令尋顔子仲尼樂處何事云々

夫孔顔の樂しみ固より世俗の物に着するもの、如きにあらす但し學者聖賢のたのしみは道を樂むにありとおもへり然れば是聖者と道と二物たり豈孔顔の樂をいひ盡すべけんや夫聖賢の心地洒々私意淨盡天意昭融して自然に一毫の繫累なし何を我人の遊樂を以て是を見るべきや嗚呼世人這裏都へて黑宰や猶兒のことし飢ては只食を求め困ては必睡りを思ふ一度富貴を得れば便聲色の娛を極め四體の奉を窮む一旦貧賤にあへば憂戚耶む事なしされば樂は其樂しむべき所にあらす憂もまた其うれふべき處ならず能聖賢の地位を見得して彼不改の樂所を語るべきかも

○花鏡六に龜は彌老ときは愈少なり八百年に至り反て大錢の如し千年にして毛を生ずと云々

秘傳花鏡は清の康熙中の作草木の事を第一に記せしといへども天文以下大方の雜書の體也今我國山川に小龜錢の如きもの多しこれは卯より出でまたしからざる也豈八百老龜の稀なるものならんや

○鶴千年にして蓋松に安んじ龜千年にして荷葉に遊ぶ故唐土人祝事に龜蓮を畫かきなどするもの毎々なり我國の人蓮華を佛具とし凡そいはひのゝしる時は忌とするこそをかしけれ鶴龜の形を作る燭臺も佛前に置て人目馴侍る何とて祝事に鶴龜を用ひ侍るや彼を忌は是も忌なり愚妄の私亦阿々

愚人死の名をたも忌おそる然るに祝とてひしめく時は必魚鳥の死かはねをならへてたのしむ是口腹の慾にひかれて忌々しさも忘れ侍る故也彌愚にして彌妄なりといふへきのみ嗚呼

○狐鼠の進退といふは前を疑ひ後をうたかふをいふ首鼠兩端とはねすみの性は疑ひ多し行は一度すゝみ一度しりそく穴を出れば必畏るゝ所多し故に兩端を持するものを然いふ是小人のすかたのみ君子の戦々兢々として戒愼恐懼するものと混すべからず

○小藝ある者これを荷ひて利祿を貪る只其名を人のしらざらん事をおそる故に自衛ひ自媒して賣ん事を求むるさまいと賤し嗚呼喚嬌娘々々唐土雜貨を賣商人手中に小鼓をならして人を集

○錢を料足或は用脚と呼ふ和俗これをあしといふ晉書に魯褒錢神論を著し無翼而飛無足而走といひしより起れり白玉蟾集雲遊の歌に初到家山辭骨肉腰下有錢三百足といへり一文を一足といふへきかも

○或人云往生講なんといへる講の字義如何念佛講なんと呼は構の字や書へき構は合也結也集也なんと言書にもありと予曰不然いにしへより朝廷の最勝講山門の三十講等本へんに書し例しなく寛弘御記雲圖抄なんと言書べんに記せし講はならはしと訓して凡其事にならふをいふ集合の義にあらす

○世に異をこのみ奇を衒ふ者まゝ多し近き比京師に藤井某と號する者あり年わかき者なりしか文學器ありて人にも稱されしされと萬好事の曲者にて我國往古の人名をかしとて豊原芥丸と自稱せし其友何某も同じさまなる名付んとて青海原泥丸とそ云ける芥丸死けるを泥丸吊ひて其石碑に書付し嗚呼男婦の鮮の重石にもならて果ぬる事をしそ思ふ

○過し癸巳冬前座主一品准后宮日光御附弟の爲に圓満院三井寺の貫首を請まゐらせ給ふ十二月十一日阿部正喬朝臣豐後守を上使として御心に任せらるへき山仰せ有し昔より山門寺門むつまじからて戦ひにさへ及びし世有けるに今日山門寺門わくかたなく園城寺の長吏延曆寺の座主の御附弟とならせ給ふ事例しなき御事にや慈覺智證同しく玉泉の正流をくみ四明の法燈をかゝけましますいかて法裔へたてまゐらすへきを山門三井各別の事になれるも高祖大師の冥慮にはたかひ侍りなん今度よりそ山寺むつまじくとも一乘の宗風も靜ならん

○大和入道見佛觀世をのかれて後水邊述懷と云心をよみける歌

かたり行かけにむかしをおもひ出て

或書に建久三年法皇崩御の時出家すといへり吉水の大師に歸して二心なき念佛なりけり

○三井の道顯僧都古人の身を隠しけるさまをしたひわたりしよりこそ罪なくて世をわたる道なれとて湖のかたに小舟ひとつおかれし事發心集に見えたり

けにうきよの中に心をもとめず往來の人をおくり迎えておのつから月日を過なんは罪なきわさにや侍らん某なる友渡し守描きて一詞なんと需しかは

長江載月雪艇

笨本ノマヤ

一棹畫霞水紋

迎輕風送歸雲

○我尾府下正月初三の後市井立る心竹は三種杖乃還意なる事前に記し侍る信州松本の八云彼城下正月立る處もこれにひとし但町々辻の中央にこれをもふく長十餘間計りの大柱毎年度出し用ひてを心とし松竹等をかざるこれを御ハジメ桂と呼亦幸神と稱す諏訪の社西の祭日御柱として立るあり市井の小童集り柱の下をわら國風これに準ずるにやいてかこひ且童輩の中一人を別當と名付水あひせて柱下これを舞するごまありといへり按するに三穗杖と辻祭の幸神と混せし風俗にや亦語らく初秋七夕町々繩を以て家と家との軒にかけ路を横切てこれをはり夫に木にて人形をいとおろそかに作り紙衣をさせいくつとなく彼繩につりおく事城下皆おなしと是亦如何なる故にや國々節序の風俗いと珍らしき事多し

○初春望夜異邦にはいにしへより家々門戸に燈をはり士女出て遊ぶ事尤にきしとかや我肥州長崎の港もまた此風俗ありと聞ゆ京あつまなんとはかゝる事なしまして他の國々此夜寂々たり凡そ今宵は一歳十二度圓月の始めなれば人はもてあそぶべきを餘雲折しもはけしき時なれば見る人もなく侍る梅薫る色もえならぬ霞にさし添たる光影心あらん人誰か見過し侍るへき宋の王夫人東坡妻なり汝陰堂にして春夜の月を玩し詩にも春月色勝如秋月色と作れり後篇されは我國の人も春夜の月を詠せし歌多かれと必上元にしもあらずや朝廷の踏歌を此頭もめてたく行はれ侍る

○兼好か見くるしき物書る中に家内に子孫の多さと筆せしを心得ぬ人も侍るにや是我身のやむ事なからんにもまして數ならざらんにも子といふものなくて有なんとといひし章亦妻といふものこそおのこの持ましさものなれといひし所なんとてらし合て見は其心を會得すへしされは世人のねかひ壽命福祿は更なり家内子孫の繁榮をこそたれも思ひとし侍るをつら思へは人の苦しみひかこと唯

此子孫多きよりそ身の辱をも省みすいとまなく役せられ侍るにや男子多ければおそれ多くまた彼等世の花やかなるを見聞てうらやみかこち顔なるにも親と成て自貧且賤しきをかなしみ如何なるわざをしても彼か身を立なんはかり事をは親の心にかげざるものなしされは士は祿位をもとめ農は田園を増して工商は利の多からんあらましに思ひを盡す女子は年も漸おとなしくなりもてゆけは宜しき縁を求て嫁せしめんと心のいとまなくやかてむこ開出して亦親族とはかりにもむつかしからぬかは縁さたまりて其調度なんとこちたく製し侍るに困し嫁して後よしあしにつけて苦みの門ひろく愁の數をかさぬる事少からずかくて常に子孫の歎を已かなけきとし生前惶々としてしつかなる心なれば道による志もなく行を正す心もなしいたつらに子孫の爲に懼おそみ痴愛に罪をつくりひたすら世にへつらひ人にこひて只幸をもとめ惆悵して禍をさけ侍るさま出塵の眼よりこれを見は見くるしからざらんや

○殯葬は送終の大事孝子順孫心を盡し誠を致へきを

我國薄俗無道にして塋域を選ばず治葬甚疎也但唐土風水の説に泥み年久しく柩を停め逝者をして土に歸する本意を失するもの多しと見ゆ丘氏の大聖衍義補是を辨する事詳也されと俗尙改かたきにや今清に至りても猶停柩の事やます康熙辛亥我實文の仲冬停柩官墳の人家火災して棺十餘具を燒灰骨辨しかたき子孫痛苦伸る事なかりしを齊家寶要附には恨めり其他天竺寺及び雷院金沙灘等洪水の時棺屋數百所漂去せし事なんと記して水火はかるへからず速に葬埋して保全すべき事をいへり

○或問順德院の建曆二年壬申正月廿五日圓光東漸大師洛東智恩教院にして遷化有しかはやかて廟堂を營し忌月を迎へ在出參堂して師恩を報せし代々の天子も亦報信淺からず綸命を下し其忌月を修せしめ給ふ殊に後柏原院鳳詔を製し此會の法則を定めたまひてより専ら智恩院御忌と稱す

勅に宜し修法然上人の御忌云々御忌の稱呼は詔命なり故に餘山のをば智恩諱といふなり

其正月十九日より廿五日に至るは何れの時より修せしを答て曰大師入滅の後五年に當りて建保四年

丙子正月十九日より廿五日に至り一七日勢觀上人行はれし

東山西福寺に安置する所大師念持の本尊三昧乃背後の漆書に曰く建保三乙亥年秋當寺に住す同四年丙子正月十九日廿五日に至り於當院別時念佛執行す沙門勢觀源智かくのことし此寺はいにしへ法勝寺の境内にして則其院なり勢觀上人これに住し大師年來の本尊を遺屬ありて此寺に安置とかや今現あり

○長良兼良或人カネヨシと呼けるを夫もよしと後成恩寺殿の宣はせしとかや三條實枝はサネエと讀へきなりとそ

○普光院の將軍義教初め青蓮院の上童にてましくける時南禪寺の景南懸慕してあひ參らせられしとかや

○郁離子は明儒劉基が著述なり
郁々乎文哉といふ郁の字離は明にむかふ義文明の意也

○近江國甲賀の金勝寺に寛平中の太政官府あり菅家の奉にて自書給ひし其位罽の下に菅原道真とあり

と菅家の御諱をは大方書侍らぬ事故實なり

○豊臣秀次五山の僧をして百十番の諺の注をなさしめられし建仁寺の雄長老總裁として慈照院に衆僧を聚故實を尋て記さしめし遊子伯陽か月を愛せし等の事唐土の書になきにや小野頼風公卿補佐になしとそ船を公にすゝむと書し類何にも見えすとなん其頃足利より上りし僧は元結といふ者大師の逸曰詩那風相舟を相にすゝむと讀なり舟は蓋也云辨毛被意といふ書にありとて言上す諸僧其本を見んといふに秘して出さす秀次急に出すへき由仰せ有しかは唐本に舟は蓋也と三字細字に書入しを奉る是日本人の筆なりとて人に笑ひしかは元結面目なくして逐電せしとそ或僧にキミヌ、ムといふ事を問しに出所なんと書て見せし但是も元結か類にや知るかたし

○周易そらにいふ時はシユヤクと讀也梅村改定之時易の語をひくにはアルフミ云と呼故實なり其他の書は其題目を唱ふるなり

○林氏下部家にいふ神籙の傳を平野より妄作の偽物也といひしを書し其終に曰我國昔より神を勸請す

る時一の箱に赤土を入て是を内陣に納る時幣を再拜して此物は本にもあらず金にもあらず神御座と唱ふる事秘事也といふ今按するに神社靈の箱とて封する法を予も傳へ聞侍りしが往古かゝる事有べしとも覺えず且伊勢熱田等の殿内に昔より曾てなき物なれば尤いふかし諸社の御正印を藏めて神輿にのせ奉る類中古以來あるにや夫を神籙の御正印といふひのろきは後世神社の印と四字を鐫し朝家より納て給ふ物也此箱を印しの御箱と呼御正體の事には侍らざるにや林氏の書ける赤土を箱に盛るの事古風の尤故實あり

○瓢より駒を出す給ありこれは卯月江録に張果老踏破故盧といふと亦張果紙を以て驢馬とせし事太平廣記なんとにあるを取合せて好事の者措し成へし

○孔老佛吸酢の圖何人が書初けん壽精庭登せしかば近頃の圖にあらず東海瓊華に記せり

○驚座新書に雪中芭蕉繁茂せし事あり非常の事歟

○佛者の右膝著地は胡法かといふに樂記に武坐致右とあれば三代とも亦此禮ありと虎關の濟北集見えたり

○大日といふ僧入宋して佛照德光禪師に參して歸朝せり是惡七兵衛景清が伯父なり景清平家滅て後大日が菴に來る大日侍者を呼で景清つかれたる色あり酒を買來れと侍者即ち走て門を出る景清我を源家に訴へて押んとするかといふかり太刀を拔て大日を切殺せしといふ此非出書阿にあ

○大燈國師出家の後五條河原に乞食行をして久しく人にもしられずしておはしけりされ共門徒等いみて是をかたらざりしに一体是我祖の面目なりとて風餐露宿無人犯第五橋邊二十年と彼像上に書れしとなん

○人を捕へて勾引して賣しもの猿くつばとて物いはんとすれば舌切る、物を含せしとぞ

○近世も出羽國南郷等には盜賊ありて人を歎き猿くつばを含せしとかや

○鵠白鳥一名天鷲國織出す天鷲賊もとは鵠の毛羽にて製せし今は大概絲なり

○櫛櫛は木の皮なり水をむくりて其皮にてもとの如く包んとするに皮ちみみて能はざるにたとふ口

の捕へぬ義あるひはかた事いふ又はことゝもるにもいふ

○梔脱丘このわけたるこきな流ふ梔脱校郎用いたたぬ物をいふ事能はるなりしと梔脱校郎用いたたぬ物をいふ事能はるなりしと

鳴呼小人庸才を舉用ゆるは梔脱丘が用なき者を多く官に入置は梔脱校郎といふべき蛇を室にやしなひ驢をして閤を守らしむる類和漢多し驢年犬日の愚漢又少しとせず

○水中鹽味色裏膠青々王銘水に鹽を入るれば見えざれどもなめて味を知る彩具に膠を和して膠見えざるにたとふ梅村載筆

○細川頼之足利家康暦元年の夏一首の詩を作り阿波國に隠居す其詩に云

人生五十愧無功 花木春過夏已中

滿室蒼蠅掃不盡 去尋禪榻臥清風

右南方紀傳に記せり夫頼之義詮卿の遺命を奉じて幼君義滿を輔佐す凡天下を以て己れが任とし中外をして奢を禁じ約を用ひ倭を退け正を進め才を撰んで毎に幼君の左右に侍せしめ從容に是を匡導し老を敬ひ諫を納るゝの媒とせし亦或時は軍を督し

て攻伐し志はく城を拔て敵を退く龍安三年河州合戦といへとも出て戦されども幕下年や長し驕暴の機日々に増し佐奸近習し政事始めに似ずしは諫て猶納られざりしにや四七の文字に懷を述て速に薙髪せし鳴呼文武の才ありて世に重んぜられしも如此後世の庸才豈補養の道をしらんや鳴呼

幽岩律師始めは才高き儒者なりしが

有て出家す世をのかれし頃陸奥に下るとて旅屋の床に故郷を夢見て斯捨果ぬる身の何事にこゝろひかれはべるべき餘習はよくさがたきものとおひてよめる

すつる身はこゝろもとぬぬ古郷を
見なれしゆめの猶かよふらん
奥の大澤なる所にて薙髪し昔の夢もさむる心地せしかば口吟有し

術業誤身三十年 忽被法眼脫塵緣

平生甚愛文書癖 換得山林一味禪

世をいとふすがたにはつるこゝろを

おもひたちぬる墨をめの衣手

くはしくは彼筆なる松島の記にあり後洛東南禪寺

の内に遊びまた泉涌寺に一院を營して静けく住せし尤當時匹如身の巨擘也

○浪華子か萬國堂裏陶天竺及清日本實永庚寅春印行せし凡一百餘部の書を考へ證して是を圖せり國の圖の正敷ものといふべき歟

○いらたかの數珠は密家の故實もありやと或真言師に問しに是は修驗者の具にしてさせる故もなし最角と書ていらたかと讀むとこたへし

○ひるの山の如法經は前唐院大師始めたまひし後代々に絶ず書寫有しによの中みたりかはしかりし頃より斷絶して取たつる人もなかりし善光寺の大勸請の聖僧戒院院大百金をよせて過し癸巳の年よりやへふるさに復り侍りしと山僧かたりし

○或人云寺院に旛かくるは供養物なり然るに多くは佛號または諸尊の種子を書て懸るあり思ふに能供の物所供の尊稱等を書べきいはれなくやと予曰是を密家に聞し凡そ灌頂の時道場四攝の旗に三十七尊の種子を書き施餓鬼の場に五佛の號ある旛を立て且刹竿に普集餓鬼の咒書百旛を掛けて幽鬼をして聚會せしむる等傳習の故實あり一葉にいふべからず

されば佛菩薩に供養する所の旛には其尊の名號あるひは種子を書て掛なん事誤りといふべからず是を餘尊に互用せば又罪なるべしよのつね道場の内外および庭旛等には決して名號種子有べからずといへり

○今世明僧多く渡來りて新製の旛珍らしく見ゆる故諸寺效て是を懸く甚如法ならざるものとぞ

○不動明王に四臂の像ありこれは鎮宅修法の時のみ祟むとかや亦二臂にして持物の異なるあり傳へて其事を聞べし

○日蓮黨が寺に安んずる愛染明王を見れば本手を合掌に造る儀軌の説に曾てなき事とぞ彼等が本尊はもと叡山如法堂の安置を似せて己が家にのみあるとのしる

如法堂は慈覺大師初て建たまひし後に惡心僧都釋迦多寶四菩薩釋迦多寶四菩薩釋迦多寶四菩薩釋迦多寶四菩薩を造りて安置し給ひけるよし叡岳要門山門記等に見えたり

其釋迦多寶の印相相傳の像に背けり彼徒あるひは合掌に作り亦是半蓮花とす四菩薩もまた山門の故實に違ふすべて彼邪徒が妄作一二ならず

呼僭上非禮なる哉

近世吉田の卜部家私にゆるして橡を服さしむ嗚

呼僭上非禮なる哉

れといさや紙を多く用ゆましき爲なれば紙薄の製なり

る心ある人こゝに志を發さらんや

○近世諸家の貴人京都より妾を召さるゝに多くは日

藤原秀能

權大納言通光

かへる衣手よりちとりなくなり

○眞福寺の上人有天今東都の眞福寺に轉移せり大栖の第三世仁瑜法親

申送り侍りし其事明らかに知らすはたやすく答へま

しき事也

○僧松譽掘州大善寺 日蓮邪徒か所編せし斷邪顯正論の破

○僧松譽掘州大善寺 日蓮邪徒か所編せし斷邪顯正論の破

癸巳三月壬申一二を抄す

經全一卷晉佛陀羅所敷四紙アリ入藏の函を出す

現前授我記云

信景云彼日徒は只誑惑にして學をしらす古今皆日蓮か穢液をすゝりて酔るか如し其高慢姦曲のいやしきさ歯牙を勞するに足ざるのみ邪徒の顯正論に青肯の出所をしらすして合類節用集および倭爾雅なるとあまましき俗流の書を引けり松譽腹をかかへて大笑せし實にも彼宗の坊主等か文盲なる今にはしめぬ事なから是はとまで無學なるこそ不便の次第也

○烽火はとふひと訓せり大和國によめる歌多し但し昔須磨と淡路とに通ふ舟には飛火を立侍りし夫を見て互ひに船かよひしをしるしの煙と呼て和歌にもよめり和州のみといふへからず

○侍從信庸朝臣京師所司代去年癸巳關東下向の時詠せられし和歌院御感ありしとて京なる人より送られし五首

逢坂

しるしらぬ人もつたへて古き名を

今そとゝむるあふさかの關

鏡山

くもらしなむかしを今のかゝみ山
うつり行世のすかたとそ見えん
小夜中山
あつまちになれて幾とせいのちとも
しらすこえゆく小夜の中山
富士
月花の三つのなかめのうちなから
たくひもあらぬ雪はふしのね
田子浦にて海士の汐波を見て
世をわたる業はかくこそいとまなみ
しは汲あさも顯くまぬみも
○橫梁先生曰仕者入治朝則德日進入亂朝則德日退云々
徳ある者すら治亂に化せらるいはんや無徳の身進むに心ありて義をしらざるをや嗚呼世人主君に信せられん事を求めるに急ならざるはなし苟も進信に心一つならば汲々として其守を失ふにあらすは必憐々として義を破らんのみ程子深く戒られし

○程伊川曰欲貴之心與行道之心交戰于中豈安

履其素平

道を行ふに心あるものといへども貴からん事を欲れば必義に勝事能はずいはんや世人貧賤に安んぜずして其進むに貪躁せんをや若幸に進む事を得ば驕溢に至る所なからん故に賢者は其素を安んじ履む其處も必樂み其進むも其爲ことあり易曰素履往無咎とは此謂なり

○寒士之妻弱國之臣各安其正而已荷擇勢而從則惡之大家不容於世矣

是嚴に人の志をいましめり安正の二字の外さらに他事なし正ならざれば必邪故に勢ひにしたかふを大惡とせり嗚呼世人奸權に媚阿て利祿を求るものを大惡とおもへる人を見す却てこれを好としあるひはうらやみて其する處にならふ者多し是亦惡徒といふべきのみ

○尺蠖穿堤能漂一寸煙泄穴致灰三千室（劉子實に事は微に起りて其未防くべからざるに至れるものすべて世に多し就中色の滅のみを老若智愚ともにふみまよふ思ひの響くらく財を捨名をくだし身を喪する和漢古今幾萬人そや此春秋中

抑營の女房李園の優人と亂行の事あらはれ其淫婦男よりはじめ彼親族迄多く刑せられ侍りしさま細々とあつまより書おくれるを見侍る事あまましき限りなりける女房なんとの流罪またゝめしまれに侍るにや是其初微を慎まずして恣に心を放ちかゝる禍となり侍る

○熱田の菩薩號を大福田と稱す（大福田大菩薩の號は是厚田順和名抄にの稱と同じき歟大論に大福は從良田生ずといへる意なるべし凡福田の言佛經に多し）

○維摩經と無垢稱經と同本異譯なり

○世界遷流を世といひ方位と界といふ
○娑婆は胡語是を堪忍と翻せり釋迦方誌にいはいく此土の人強識念力能忍苦樂堪任道器故名堪忍云々（數觀經等の釋元廣し今異之）

○僧を衲衣といふ按するに佛祖統記註（僧衲衣をよしとせり衲の字は俗其義を失ふといへり）

○歌書に大原の三寂といへるは如何ぞや曰枇杷贈國長良（冬關公）五代從四位下爲忠は歌人なり其次男皇太后宮大進爲業法名寂念世繼の作者也其弟壹岐守賴業法名寂然往生傳に入れり其弟長門守爲隆法名

寂超此兄弟三人ともに有智の歌人なりし當時是を稱して大原の三寂と呼し也

○中世の俗語婦人を女性と呼し近來小童を小性といふも此類ひにか亦大家の息女を御料人と稱す東山の公方義政の御料人の局の如し

○常徳院將軍家室の女三時知恩院の住となれり入五郎萬徳院將軍家義晴の女も亦此後住なりしその師は寶鏡寺の理源尼なり今日の如きは入江殿寶鏡寺殿皆皇女の尼公住持しまふ

○人身十神は

丹元神心神	幽由神耳神	照靈神目神
大和神口神	玉璽神鼻神	含明神肝神
能華神肺神	常在神脾神	魂倅神膽神
育嬰神腎神		

見余氏事物異名ノ上

外に耳目口鼻あり内に肝肺脾膽腎あり是を統るは心也故に心を主宰とも靈府とも稱す心は性情を合したる名動靜感應皆一心の主宰也心正しき時は百體俱に正し心不正にして何をかなすべき人にして人ならずや侍らん

○大毘盧遮那成佛神變加持經大日經也

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教主經
蘇悉地羯羅經 金剛峰樓閣一切瑜伽祇經
大毘盧遮那佛說要略念誦經

右眞言宗の五部秘經といふ

○玄義 文句 止觀法華の三部是三大部なり

金光明經玄義 同經文句 別行玄義 同文句觀音

觀無量壽經疏妙宗抄ト云

これ天臺宗の五小部といふ章安の記なり

○佛法象教形像佛也

余氏が事物異名に見えたり是佛像をいふ我國佛

をホトケと訓するは浮屠形の音便又佛陀教の音

轉といへり但按するにホトケは佛教の二字の音

便にかフツトホトと音通すは字の略音佛教と

は佛法像教の中略歟

○沙門桑門桑門是其轉語 比丘悉葛もまた然り僧を

蒙古には出魯忽兒と呼とそ僧に和訓なしぼじと歌

書等に書るに法師の略音なり尼をアマと呼ぶを和

訓とおもへるは非なり阿摩は老女の梵語也比丘尼

の事にあらず

○修多羅仁王經の二諦品に翻して法本と見えたり是

佛の言教諸法の本なるが故といへり書物を本とい

へる是等の意なるべし元漢唐の人のいひ初し事

なるへけれとも何の書に經書を以て本といふ事見

あたり侍らす佛書に此事あるを見て抄して博に備

へ侍るのみ儒家の書に此事あらは後人幸に書添へ

たまへ

○枳根をケンホノナシと讀り按するにケンホノナシ

とは常にいふ梨實歟玄圃梨江南橘と對したるのみ

○馬の一歳なるを駒と云四歳なるを駒といふ

○阿濕婆は馬の梵語なり唐土にて馬を産する

所尤多し其中古へ雲中府なり大同に出るものを

良馬とせし大抵西北方に産するものを勝れ

たりとし東南方に産するものを劣弱とす我

國には東北方に産するものを良とす按に唐

土西北の地は寒に東南は暖なり我國東北の

國寒多ししかれば馬は寒國に生ずるがよき

と見えたり

○牡驢北馬に交はりて生る子を驢といふ牡馬

頭の圖四尺餘



フナギトミ
重驢鼻四
寸ハカリ胸の
は毛なく腋の
ごとくし

手は備の
ごとく四
指也

足はうしろむきで
線のかき爪あり水
かきあり

豆州豊川村は牧野家^大の采邑にして吏^三守^三綱^三を置て事を主維せしむ今年正徳四夏其妻夜々物の爲におそはれしか或夜終に妖死し面皮をさへ剥破られし五三日過て物有て家に入を覺ふ吏即ち刀を抜て切けるに手さたへはしながら飛去て形を見ずされど血ながれて遠く行し跡あり家人等血を傳ひて尋ね行しに四里計り去て栗山村といふ里の奥山に一窟ありて廣さ四五間に見ゆ其内に聲ありて牛のこどく吠ゆ此よし吏に告しかば是を啓し牧野家より家人數多遣はし鐵砲を以て彼窟を打しかば果してわたりはしり出けるを打かこみ鎗にて突留しとぞ云

牧野家の家人 鈴木 平八 石原 修理
小澤 傳藏 山本 珍彌
早川八郎右衛門 津村八郎兵衛
佐野善右衛門 渡邊 傳三
足輕五十人

といふ人侍るされば深山幽谷の間には見も馴ぬ異類多きこそさいつ頭歟越後國桑取山にて打留し獸を辨なりといひし亦信州松本の人かたりけるは廿四五年前水野家の家人某か家へ毎夜ものありて來りおひやかしかけるに或夜よく見れば老人の如く長高く夏夜なりしかは蚊帳に手をかけて内を見入亭主蚊帳と共にいたき留んとせしにするくどぬけてあがり窓より飛出るを刀抜て切付しかとも跡なくうせてすさまじき毛多く残りしをまのあたり見侍りしよしへり此度の異物も此類にこそ眞偽如何ながら人の見せし圖をこゝに寫して後のなくさみに備へ侍る

鹽尻卷之五十五 正徳

後漢魏桓 内學外學
漢儒注書 因縁の字義
回聲妬 落草折合
富地の老鴉 擾室連
遠州木坂大楠樹 彼岸中日に讀し歌
春秋の彼岸會 天竺曆阿蘭陀曆
春の比母のおもひに有て 庭の綠櫻咲そめて
蓮社傳 日本淨宗蓮社號傳
泉州堺旭蓮社 大樹家蓮社號
先吾綱誠公法諱 某寺殿某院殿と書事
戒名道號 二字の法名
往古廷臣功ありて死すれば 我國古へ姓に付たる
天皇我詔旨^其萬の訓 儒典は菅江清中の訓點
瑞雲山釋迦堂御身拭 熊野へ詣る人に送る歌
葉栗曼奈羅寺參詣の記 龍洲上人の説法
はやく友なひし人に逢し事 或禪院に遊びし時の詩

よろつなきに事かけぬ様 よはめの靈怪
眞心派盲相宗と邪法の事 極樂教寺の鐘鐺
銀座の者驕奢遠島的事 甲午金銀改鑄
黒田宣政隱居の事 淑室藤婦人小祥忌
友人端午の詩 茶園
仙人條 甲午五月九日の野分
靈まつる比雲時々立覆ひ 孟蘭盆會排勝
娘におくれし人を弔ふ歌 盆經に百味五果佛に供す
正徳甲午米麥高價 琉球の眞眼紙
甲午八月八日の暴風

○後漢魏桓不_ニ肯仕_一鄉人勉_レ之曰子_ニ祿求_一延以行志也方今後宮千數其可_レ損乎_一厖馬萬匹其可_レ減乎_一左右權豪其可_レ去乎_一慨然嘆曰使_ニ桓生行而死還_一於諸子_一何有哉_一朱子語類百三十五

嗚呼道を以て仕へがたき事漢の時猶斯のごとし況や季世をや陳仲弓か太守の謗を分ち官者の葬を送りて是か爲に詭遇する事を得たるか如くならては豈一朝も官に居るへけんや君子の仕へざる事宜なる哉

○内學災異讖緯_{（外學六經義理ノ學）}風角鳥占ノ類

是漢儒の稱呼なり釋氏内典外典の據なるにや

○漢儒注書只注_ニ難曉處_一不_ニ全注_一蓋本文_ニ其辭甚簡

語類

古人の注解甚簡なり後人の注解甚難時風如斯歟夫後世いにしへをいふ事彌遠くして其代の文字を會得する事甚難し此のこゝとく注解家をに繁く書も亦多くなり讀者多岐に迷ひて古人の意をしらざる事多し況や閑議論を以て自家の博を衒ふ類をや己をわやまり人をわやまらしむ

○或人云因縁の字義共によると讀其分意如何そや予曰因ハ由なり縁ハ循なりひとしくよると讀とも意豈一ならんやたとへは一草木の種子の如きは根枝花葉の由來にして其生すべき理を具ふといへども水土に因循せされは其芽生する事能はず然れば事物の成る皆因ありて縁し以て成に至るのみ

○因は笏の本字_{（笏は俗字なり）}聲は音慶_{（本字の字なり）}今聲の妬_{（音石女無子者曰妬俗誤か）}る類ひ多し

○一休の詩に四十九年落草坊_{（落草は不_レ在_一）}洞山の語に折合飯_{（炭裏一坐折合は畢竟難なり）}

○禪語に當地の老鴉といへるは開口成_レ禍なり嗚呼世に交るもの稍もすれば舌頭の禍多し古廟獅子舞辭の如く空しく口を開たるのみならは人の耳にさかふ恨はあらし但し言責ある士大夫可言して言ざるは祿位を貪れるなり豈忠義の臣ならんや不好看云々

○榎室連の姓は上宮太子山城國巡行の時水主の古麻呂か家の門に大榎樹有し太子曰此樹は室の如し大雨も漏すと依て榎室連といふ姓を賜ひし由姓氏錄十三に記せりされは我國いよしへより榎を人家に

植る事其枝を伐は彌繁茂するか故枝の本と呼て人用ゆるに利あればなり

○遠江國木坂けがより上りの方に古大楠樹あり民家其細き所凡圍十七尋なりとそ亦伊勢月讀の森内なり古大松樹ありて一國知らざるものなりしか去る年辰の秋暴風に轉倒せし長二十餘間有しとかや凡そ古地には限りなき大木もありなん

○甲午春の彼岸會中日うすくもりて入日かすかに見え侍りけるを望て彼三障の雲立おほひたる心地し侍りしはとに

ゆふつく日霞こめたるやまの端は

こゝろにさはる雲かとそおもふ

○凡そ曆家春秋の彼岸會を記する事久し昔は春分の日を中日にあたるやうせし事安倍家の曆本にみえし近世は春秋二分より三日目を其初とし六日目を中日と定め九日めを終りとすいにしへは彼岸に入る日若没日にあたれば一日を延て次の日を入とせし故實なりしに昔如きなり

眞享曆に没日を用ひす故にいつとて二分の一日を隔て彼岸の初とせり

亦彼岸の中日は日輪正面に没す故に淨業日想觀の時といへり曆家の説に曰日の正中するもの春は春分の前三日秋は秋分の後三日正しく日赤道を行なりといへりされと大方二分は時正の節にして其日に拘はらず日の西に入るを正方とす

○天竺の曆は一歳を三季とせり熟時正月及時五月寒時九月されは正五九月は印土三季の初月なり阿蘭陀等の曆は廿四時とし一時を六十刻と定め西の時を一日の初とす閏月を置事なくして寒暑たかはざる法あり其大略數量詳説されは萬國の曆法各自其法あり或建寅の月を歲首とするあり春分を以て年始とするもあり阿蘭陀國は唐土の冬至より十日目に當る日を元日とす或は國によりて月の初初る日を一月の首と定むるもあり蠻夷の國曆を見てしるへし

○春の頃母のおもひにありてやかてかしらおろし侍りし人の又のとし彌生の頃修行に出侍るへきよし聞えけるほとにあはれもひとかたならすおほえて別れてし春をかたみのひととせをたちへたてゆく華のしらくも

○庭の縁櫻咲初ていまた盛ならざるに烈しき嵐にさそはれ良いろなく侍りしこそ世のさためなきさまも今一しは思はれ侍りて

常ならぬ世をしれとてや櫻はなうつろふほともまたて散ぬる

○蓮社傳

普正覺園悟大師無門ノ住廬山虎溪東林寺招賢士修西方淨業其地多白蓮華且彌陀佛國以蓮花分九品接新往故大師稱其院曰蓮社或云此社者不爲名利誠所珍嗜如蓮華清淨以名之亦大師門人法要巧刻木爲二十葉蓮華植此池中用機關凡折一葉是一時與割漏無差俾禮念不失正時故名蓮社社結終聚會處假之爲名

唐詩云大道本來無所詮白雲那得有心情遠公獨刻蓮花漏併向山中禮六時

○日本淨宗蓮社號傳

釋白蓮社諱圓心京兆人未詳其姓族德宇宏智鋒爽邈然不啻世味唯好顯密妙旨既洞晚投鎮西聖光師修淨業久矣四條院天福元癸巳歲三月從

國使橘尙書入宋理宗紹定六年登廬山謁容禪師傳衣鉢而歸朝自號白蓮社淨土宗社號權輿于此旦師乃廬山義祖也光師門人亦有敬蓮社等蓋自此時社號聞在

○勅額扶桑廬山大阿彌陀經寺開山等一祖賜紫特號旭蓮社大乘澄圓大菩薩智演國師大和尚泉州大鳥郡產也姓源左典義氏之裔泉州刺史義貞男母百濟氏噉無嗣禱泉州家原文珠大士一夕開兒啼庭帷便開戶舉以爲子五歲親文墨暗誦曼殊神咒闔里嘆異焉師梵相奇偉性悟而器闊九歲入東大寺師圓雅公而蓮染授具長惠解天然才氣秀逸研究俱舍唯識闡奧洞徹三論花嚴妙旨既而至極尾山精練兩部秘教且善惡靈字義然傳台宗於承通觀豪二師每友東福虎關公觀敲禪要且久學淨教浴九品西山二流亦遙游東關謁鎌倉光明常樂大和尚循其獎訓慕鎮西正系自爾名望新而盛弘通淨宗勸以稱名一行花園帝文保元年丁巳泛溟洋徑入元祐四年登廬峯見東林愛曇普度大師學輪下而授無邊海藏口決傳佛國惠遠之正脈剝蒙教外證許在元凡五年巡歷

○大樹家蓮社號

東照宮安國殿 德蓮社
台德院 光蓮社
文治院 順蓮社
有章院 照蓮社
貴介蓮社號

瑞龍院尾張榮光友卿 天蓮社 龍雲院嵩松侯

○我

我先君親職御自の法諱を定めましけるに院號の上に御官位を置せたまひし御法名は建中寺の智伯

從三位前黃門兼心院院字の下殿の是は官位は朝家の綸命院號は僧家の號し奉る所なればかく書せたまひしとなん但し中世以來貴族院號の下必官位を書事牌子の通式にや

○某寺殿及其院殿と書は元一塔頭を立し人其寺院に位牌を安置する故本願の號を先として法名を其下に書せりとへは尊氏將軍の位牌のごとき云々等持院殿贈一品大相國仁山妙義大禪定門或は仁山

名蘭勝區得謁師印可於此齊携三藏佛圖將來佛舍利遠公傳持六時禮蓮華爐及衣蓋文籍若干歸朝實後醍醐院元亨改元辛酉也其後明極同船而飯也帝召數問去內外謂佛家慈風僧中龍虎帝崇其道德正中甲子元年特詔創梵宮勅號旭蓮社以稱舍呼蓮社普救天下令修般舟三昧益轉綜英發後村上院興國四年壬午北主康地天疫疾比屋愁苦天倫憫宸襟便余演公獲災師應命昇九禁奉授一乘圓戒使王公以下士庶七日唱一百萬遍念佛應時妖氣忽退消四民呼萬歲帝感激之餘特賜大乘澄圓菩薩崇號被紫袍且敕宣宸儲寺額號扶桑廬山大阿彌陀寺其勅書曰法師遠涉滄波覆巖異聞於絕域遐游唐縣研妙機於碩師宜施食封百戶云々恩榮之盛亦如斯師名翼四布振彌天威風丕漲吉水法流挑廬山傳燈淨宗中興誰出師之右乎我國禪淨兼學道場以旭蓮社爲先在東後龜山院文中元年北主應秋七月廿七日師召大衆而上堂遺誠普說不異平日端座合爪而辭衆向自影唱佛名悠然而坐化報壽九十有餘歲遺述十勝論驚覺論獅子伏象論拂風論等若干帙藏寶篋今皆行世

等持院は山城國葛野郡衣笠山の麓に建られし鎌倉にては基氏尊氏の爲に香火の場を立て長壽寺と額せらる故に此寺にては尊氏の位牌に長壽寺殿と書せり其殿の字は法興院殿法成寺殿等古世に呼し稱にして薨後にも猶斯く呼ひし一時の俗風なり京都將軍家前鎌倉將軍家の時北條氏等寺院を立て卒後牌字に某寺殿など書せしよし世の風俗となり凡そ貴介の法名には必官位の上に院號を蒙らしむ近世に及んては平侍といへども僧家へつらひて大槪院號を書す日蓮宗の如きは商人農民といへども金を出せば院號を題す甚敷に至ては河原者にさへ院號を授け侍る事京江戸まゝ聞え侍る彼は乞食の部類なり何そ士家とひとしくすへき日蓮黨が私こゝに至れり嗚呼

古例院號の上に官位を書する法號ありやといふ人有予日相州鎌倉泉ヶ谷なる慈恩院の牌子の中に贈正二位大休寺殿古山源公

是足利直義從三位左馬頭の法名也先公獨院號の上に官位を置せたまひしにあらす

○法名に戒名あり道號ありされど中世までは貴人と

いへども只二字の法名の外別に道號書く事なかりし御堂關白道長公の法名を行覺と號し多田滿仲の戒名を滿慶と號せし類也其後士家剃髮して房號法名を付事間々見ゆ熊谷入道を法力房蓮生と稱せし類也法師と稱し

○鎌倉將軍家の時宋の禪僧多く來朝してより道號を稱する者世に聞えしかとも猶二字の法名のみなるもわりし二位尼平政子法名を如實妙觀大禪定尼と號せし類なり亦北條泰時の位牌鎌倉當樂寺にあり夫には

過去觀阿彌門過去に法名にあらす後世に普く歸元歸本等のことし

とあり亦經時の牌子鎌倉光明寺にあり是には寺號を書すといへとも道號なし禪宗の寺ならざる故そや其號に

蓮華寺殿安樂大禪定門 かく題せり淨土宗普に只二字の法名あり今の本願寺門徒の法名のことし又いにし

への位牌は大方雲日首也 斯の如し禪宗盛んに興てより大人官家の法名には居士號を書せり今諸宗是に效て



忍しのぶ海原足しのぶ禪ぜん雷らい麻ま呂りょを貶して連の姓を賜はりし類なり

○宣命に天皇我詔旨其方とあるをスメラカミミコトラマシと讀事有識者の傳なり勅旨の二字をミコトラと訓せり草木和詔旨其方はミコトノリニアラマシといふ轉語にミコトラマシとよむなり凡そ有職家の名目其讀方を傳授せしして私に唱ふる時は必訛謬多くして知者の笑ひをとる事毎々なり

○儒典を當江清中等の家古しへより讀來れる訓點あり佛書は山門寺門南都等各自其讀方ありて相混ぜす近世は雅意に任せて私讀す其理に違ふ事なしといふとも識者の爲に恥ざらんや

歌書猶讀かたあり妄意に讀へからす

○瑞雲山の釋迦堂瑞雲の瑞像 御身拭久しく絶けるを此春中子雪峰和尚再瑞雲の瑞像ひ興し行はれ侍るまわりて白布なんとまゐらせ拜禮せしか堂の柱に書侍る

春風吹花拂 拭赤檜聖像
曉林殘月觀 瞻紫金靈光

三十年あまりの昔の春も猶しのはれ侍りて散殘る

居士を稱して榮とす按るに中阿含經に利刹梵士居士工師を四姓とし長阿含經には利刹婆羅門居士首陀を以て四姓といへり居士とは譬論經に所謂毘舍と同じ是商賈市人の稱呼なり亦長阿含經を按するに營生居業多積財寶一名爲居士といへり普門品科註にも居士を多財居業者也とあり但亦云居士道居山居財之士等云々此中居道士といへるを以て官人に宛侍るにや居士は仕官の稱呼にあらす唐土にて道家の科品にある稱なりされは庶人にして道を修行する者を居士と呼は可なり今公卿大夫等を以て居士と稱するは是を貶せるに似たり何の榮かあらん

○我國往古廷臣功ありて死すれば諡辭を賜ひて號とせし諡は藤原不比等以來なり東三條攝政兼家公入道して如實と法諱ありしより大方釋氏法名を授けまゐらせし

南朝の時しはらく諡號の典ありし

○我國古しへ姓につきたる戸名朝臣朝臣連連の類なりありこれを以て姓の高卑をなせりされは官人罪あれば戸を卑くし給ふ事有續日本紀四十等を見てしるへ

櫻の枝に結び付侍りし

跡とめてふたゝひおくる嵯峨の山

はなになすれぬ世々のふるみち

清涼寺の身拭は安嘉門院後高倉院の御母北白川院持明院中納言藤原の女名は藤子三月十九日逝す惡死したまひけるをかなしみ釋迦世尊の靈像に禱たまひけるに佛告によりはしめて行はれし法會なりとぞ

○熊野へまふて侍る人のかたへ手巾を贈り侍りしかその包み紙に書添へ侍る

岩田川清きなかれをむすふ手に

にこるしるしはあらしと思ふ

○葉栗の曼茶羅講寺は村久野の前へ飛保村にあり有本州府北の古跡西山壇林の名藍也宿眷の遠き道にしもあらねと思ひ立つ志なほざりにして過侍りしを何かしの西堂此春はとにかくまふて來れなんと誘はれ侍りしはとにやよひの末廿九日彼賓利にまゐりぬまた夜を殘して出侍りし川霧打わたりて長橋半たへ村煙たちのほりて曉鐘遠く傳ふ生田川の名は難波の名所とひとしく初音さくはとゝきすも情あけに横雲白き東嶺のすかたはたをかし

これもまたいつちいくたのはとゝきす

かたらひすてしあけはのゝ聲

生田の社はこゝより北にある井上庄芝原といふ里にましますとなん文治丙午の春御位記を重ねて從三位と聞えさせたまふにや程なく岩倉の里近く古城の墟尋ね侍りし東四三十四間隔てこし昔織田の嫡家左馬助敏信の男伊勢守信安こゝに築て居城とし本州上田郡を進止していかめしく聞えしに其息大和守信武捨見院の贈相國と不和の事出來り永祿二年にやあへなく亡され侍りし物かはり星移りて只牧童の蒔のこす春の草のみ年々生繁るのみとなりぬされは百花好を争ふも春久しからず一丘恨をのこして曉露行人の袖をうるはす人の世の定めなきさまも何くれと數へられ侍りて

蕭々荒郊嘆鳥歸 人民城郭古今非

常時誰裁相條下 一片曉風柳絮飛

たつねみるあともさひしき八重葎

秋ならぬ袖に露をみたるゝ

芝原村を左へ行き高雄庄に入りぬ乗良といふ里の名舊りて桑林綠深し蠶養の業民多かる所にや苑緑

の思にこそ貴も賤きもはたへをかくし嵐をふせき

侍るものを愚に思ひ忘るこそ天津罪人の類ひなら

め右の方は寄木へ往路ありそこには稻置の天神ま

します俗に天大津日子命は稻木之別尾張國別祖と和銅の神記には侍る國民毎に參りて應を求め侍る御神なり子母の喪いまた一闕を終らざれば尤も參り侍らざりし打過行はとに茶園多く見ゆこゝも

酪杉の産ある飛保茶石花のいみしき名はあらずと

も租舩の領を成へきに足れりさて飛保に至り志侍

りし精舎に入る倉環いと高く木立物ふりて望眼清

し山密にして麟鳳栖門開けて凡聖通す山門の外に

神廟の製し賜ひし禁榜あり先正東軒にかくと案内

し侍りしかはよくこそとてもてなざる頼て打つれ

て大殿にまゐりぬ十餘間の梵宮彩節嚴に坊舎凡そ

十三院東西につらなり侍る瞻仰して階を登れば長

廊畫靜にして香蕭煙残り金界塵なくして磬音隱々

たり八人來迎の聖儀三尊あさやかに拜まれさせたまふ

彌陀尊は佛工安阿彌所造爽侍は雲空上人の時漸

に作りまゐらせらるゝと云々

いやゝしく香捻して九拜し奉るに恐喜交流る

紺殿風回靜玉爐烟絶薫一偈彌陀佛他祭事云々

三祖善導和向東漸大師善觀師の眞影を拜し當山第一祖天真葉運

上人の像に謁す師は花山院内大臣藤原繼公の令子

西山の正脈を傳へ名望一世に高かりし當寺を基し

て圓福寺と號せらる後醍醐天皇特に紫袍を賜ひて

恩榮そのかみに輝き侍りしとかや光明院の康永二

年六月十七日に示寂せり第七世雲光上人の時寛正

後元年三月六月廿二日靈異ありて觀經の變相を感

得せり是より日輪山曼茶羅寺と改號ありし或云圓福

と成後奈良院天文十年三月廿五日勅願の綸命を下し

官寺に列し給ひし凡は善導の風高く壇林の花薫し

て負笈の學徒文を接す叔曼茶羅堂に升り侍りしか

は院主矩範公出世の僧侶をして御帳をかゝげしむ

近く拜しまゐらすに丹青花清くして愁懷をひら

き輪圓月朗にして白頭をてらす又類ひなき聖圖に

向ひ奉つるも因縁かたしけなく八萬四千の相海と

こしなへに普攝の恩光を流し六十萬億の金山時に

能觀の靈臺に座し給ふ大慈大悲の尊容中々こと

のはにかけても盡しかたし心の行計りを拜奉りし

是より方丈に至り院主を禮し良音聞絶せし事を謝す稀に來る者淺からずと聞えて寶庫の靈像名畫以下を出さしめ是を慈寶に拭床上に置いてみせしめらる西方三聖の大像は尺餘七顏輝の筆にして當山第一の什寶也

按に當國部田祐福講寺の三聖を小三尊と稱す類は曼荼羅寺の三大三尊に對せる名なるへし其他思教牧溪の畫圖野山大師惠公僧都の眞筆北殿司の涅槃像等世に稀有の靈像なにくれと歎ふるに違わらず亦高祖東漸大師鏡の御影とていとたふとさ肖像まします自畫眞像也亦圓合の中に造りこめまゐらせし文珠大士は鎮守の八幡瑞籬より出現ありし靈像とかや猶からのやまとの名におふる筆の跡見るに盡せず且代々の繪旨武將の證章金田の榮を添法燈の光を増既にして院主の跣座を拜謝し侍るとて

かひらえをいかにむすひし法の水
ふかくや世々にちきり置けん
上人のかへしに
法の水なかれの末もふかさえに

ならん事を憶れ心酔て智暗からん事を省みは誰か世に罪を招かんやなを已心流水に隨て去殘軀白雲と共に閑ならは是非の塵なく絶なんよしやあし垣の短き世にみにくきすかた待得侍るたに恥かしきに何事をか期してのとけく思ひしつまん

睡蝶夢邊別春 遠山長水憺行人
落花隈底風光晚 新見孤螢點綠蘋
名こりなく春もなかれて暮かへる
あしまのはたる浪による見ゆ

○龍淵上人號圭以智京より來りて卯月の初め法席をひらき日々唱導ありしかば參りて聽聞せし祭の日葵桂を包みて書添て送り侍りし

あはれしれ法にあふひのもろかつら
なかし世かけてむすふちきりを
五月十一日書量品の説法おはりて同向侍りしほとに詩歌各一首を詠して志を述侍る
鷲峰雲盡耀金輪 遠々新識五百塵
無滅無生亦無跡 清風特地自天真
浮雲にこゝろ隔てしまひより
入るとはみえし鶯のねの月

むすふちきりは世々に絶せしかくて正東軒に立歸りて思ひはへりしや、日西に傾きなんとす門を出て吟鈴南に向ふあるしも立そひておくり物せられし縁にしあらはまたもと思ふこゝろさへ此世をなくおもふ猊とやなりなんいつまてかは六道の貪里にさまよひて三業の罪を貪り侍るへき娑婆にまたなからふとも夫をうれしとやは思ふへきけふ半日の霞に漱き一夢の春を領し侍るこそ塵の外なる心地はすれ歸路光風に詠し古池野を経て赤童子村に至りて長幡寺の大慈堂に參りぬこゝは當國三十三所の一區にて華峰大師作り殘したまひし正觀世音を安置しまゐらす護摩壇上性惡忿怒の御形世にいちしろく赤童子の村呼は此靈像に依るとなん彼はおかみまゐらすにも皆大悲救世の善巧いとくたのもし永き日も今は峰近く落て雲の色花やかに見ゆ小折石佛園なといふ所を通るはと苗代青みわたるて民の家數くならへり扱も俸祿の資を保て耕稼の苦ある世をしらす百民の上に肆にして勞役の勤ある事を忘れなはいかてか世に應し務を経侍らんや情老て思ひの邪

十五日は彌陀感應の日なればとて人々修善の志し侍りしより放生を勤め侍りしにあし多く持參りし中に或同法料足の包み紙に明日の放生こそ殊に悦ひおもへるとて
うれしとよ法のなかれの友千鳥
なきてそよはふなかさねふりを
返し遣はす
せにかはる命もうれしとふとりの
あすかくとなむ君にしらせし

せにかはるとは伊勢か歌によせて
よめるを思ひ出しはへりし
嗚呼花を銜ひ飛雀を彈射し水に描く遊魚を網罟せん類誰か情ありてせんやされは一龜を放て授江の危を免かれ群蟻を渡して魁選の榮を得しも皆物命を活せし報ならずや厨に腥を絶て食はざる迄こそかたからめ誰か五忍心なくてやはあるへき齊宣王の手にかなしめるを孟子其心こそ民を保ち天下に王たるに足へしといへりし過し頃泥江縣のある屋の軒に雀の雛とも並居て鳴を鴉忽に飛かりて食はんと思はれは雀あはて、散々にかけりにげし

いかにしけん一雀や、するはびて立もやらざりしを鳥やかてくはへ羽たゝさあがる其悲鳴聞に忍びす道行男女車ひく男迄立とまりてあれよくといたましかりしかるに亦高きまひけるかありて是を見うはひくらはんとけはしく落かゝり鳥に打あたりしかはさすかは已れに勢ひ勝れる猛鳥なれはおそれて雀をは地に落してにけざりぬさても二鳥の暴なるふるまひの中にさゝやかなる雀子厄せられて萬死必定なるも命至らざればにや助かりにさあられなき車客等も其罪なくて死せんとせしをあはれみ取わけ手にのせ水のませとくしければ程なく生かへりしを竹林の中に放し飛しけるをまのあたり見侍りしけに慈愛惻怛の心は誰も一同じからざるべきや天地は物を生ずるを以て心とす夫天地を包著して作爲する處なし只是物を生ずるのみ古にわたり今にわたりて生を不窮人兩間に生れ此生物の心を得て心とす故に箇々他に背たりと朱晦菴のいへるざる事ぞかし凡そ禽獸と我と形異なれども同じ天地の生物ならずや猶良因佛性のわくかたなき道理をしらは拔苦與樂の心なから

さるへけんや世儒放生を見て小恵なりと嘲る事なかれ是即惻怛惻隱の誠より發して根心物を殃ひする惡罪をいましむるに足れり
○はやく友なひし人美濃國高須に移り住て久しく逢ざりしが思ひがけず路にわひ見侍りて夫があらぬかと思ふ迄に見わすれ互ひにふり行かたちにおとろき侍りし其後便につけて文遣るとて申送りぬ
かゝみ山つれなき老の影は見つ
人をも身をもしらぬ翁と
○或禪院に遊びて池頭月浮み松聲しつづくして心の塵もはらふ計りに覺えし主の僧風月又君か心をわつらはし侍るにやといひし程に
風入古松靜 月生池中間
由來是風月 兩箇自然々
○古人云よろつなきに事かけぬやうを思ひつけふるまひいけたるよしと言勞謙けにさる心そあらまし
あれはある物にぞこゝろくるしきに
なきをなしとていかうれへん
○俗云弱めの靈怪とは按するに維摩經に譬如人畏

時非人得_二其便_一といへる是なり凡人事物に恐畏する時情已に怯弱なり故山鬼其便りを得て是を憐すをいふ

○甲午の春常州生浦_{士家}の民邪宗を立_{日蓮}真心派とかやいふ事あらはれて多く召捕れ獄に繋れし亦駿河某の村_{小林又左衛門}にして、こが宗旨相宗とて密に邪義を弘む_{是亦日蓮}更_中九郎是を捕へ東都に送り其邪義を尋ねさせたまふとかや_{山城守法華}是等日蓮義を表とし契_カ利_リ斯_シ當_トが邪法を弘めんとすと聞ゆ凡そ日蓮黨が邪義詭_カ古_コ今_イ一二にあらす我日本の外道天下の國賊とは日徒なりけり

○天靈師知識を唱へて極樂教寺の鴻鐘を鐺侍りし甲午五月朔日より勸同二十三日鐺鐘六月三日供養正覺寺の上人堅壁に銘を請へりしに即筆をとりて
有機而應、依感而通、于幽于顯、同證圓通、とそ記されける序ありみな月四日比丘歸京亦來る事もあらしなど聞え何となくあはれと覺えしまゝ、
林頭狐月拂烟波 一片飯心別恨多
流水有期誰能定 奇峰添淚白雲歌

かりのよを同じ旅寢のゆめぞとも
おもひわかれたぬ衣手のわかれは
師も名残をしきなどきこえて和せらる
離筵掩淚有餘法 折抑擔風愁緒多
一錫隨緣水雲路 山前江山入飛歌
かりのよにこゝろとめしとはらひてし
たもとといかにけふはつゆけ幾
一會一別水上の萍のこゝろ行とまる恨ね一旦の夢
たとひ重雲たへたつとも同じ蓮社のちぎりある身
は中々金池の會こそ願ましかれなんと聞えしに今
一しはあはれなりしかは人々打なきぬ岐阜の方に
行よし聞て
これもまたけふたちわかれいなば山
みねゆく雲よまつとしもなし

○京師銀座近年おのれが利をのみ貪りて其品賄あしく身の富日々にゆたかにして驕張大なる事公侯にも過たり故に今年甲午五月十九日彼家々に_{深谷庄左衛門中村}封印付られ同十七日遠島に放され財寶ことくくせらる凡數百萬金有しかや東都にしても中村某内藏介追放の御沙汰ありて跡なく亡びに

しかは國政日々にみたれ必亡戒へからざるに至りしとかや夫上天子諸侯より庶人に至るまで其身を脩めずして燕安を事とし驕侈を究め貪慾をほしまゝにせし人何れか亂に至り身を亡し家を亡び國を敗り祖先の祀りを絶さずして有べき

○淑室藤婦人小祥忌之辰恭拈一辨香

雪峰

枯片爐頭一線鳳 遍薰十劫覺輪中

金銀ともに慶長の上品になしかへざる今の金銀
 倍をもつてすべしとぞ
銀はまた其品多し
 薪令に見えたり

○筑前福岡黒田家侍從室政俄に氏族某へ家督の事聞
え侍る燕安不法の故とかや昔北齊の主滿侍中和
士開を寵ぜし士開は佞奸の内臣凡諸諛百端にして
順從他に異なりしかは寵愛日々に隆んに毎に左右
に侍り言辭容止諸の鄙態を極め只燕安夜を以て晝
に繼ぎ近習に復君臣の禮なく中外巧言令色を事と
しひとへに賞賜を貪侍りし齊主意を極めて樂みを
なし官爵財用等の國事は外臣に分委し三四月に一
たび朝を視し其身は專に聲色を耽し好佞に親しみ

驀上引愁古林風
驀隙迅駒追日月
殘鐘夢暗紫烟中
一片清輝往事空

同法來會して二百萬遍の罪號を唱へ花臺を嚴飾し
威光を増輝しまゐらす回向終りて香を薦めまゐら
するとして

青冥桂月照空狀
白雨洗蓮薰佛場

忌日は初秋なれども中元の前に迫り在出心静ならぬ折からに侍るはとに水無月の中の二日先妣の誕日をむかへて追志のわざをなん修しまわらず當日

はたて原ちりにし秋をおもふにも
つゆにさきだつ袖のむらさめ

或友のかたより此歌をわはれかりて
 萩の葉をとづれ初る秋ならで
 いかによほるゝ袖のしらつゆ
 と申送りけるもわはれなりける

○友なる人ひさしく東にあり端午の口號なりしとて
文の次第に書おくりし六月の書翰

三年爲客自堪憐 強對萋華淚潸然
官舍蕭々愁臥程 不聞鄉信却聞鶯
と聞えしこそわはれなれ返館遣はすとて

客情入簾幾回憐　武野懷遠眼悄然
孤枕夢飛千里月　曉窓空聞一聲鶯

たかへり花經及び遊生八歳等にいへる眞珠蘭一名魚子蘭といふものはなり

○仙人條園陽雜記十力を捺するにいふげんけの類今ふたりの瓜
なり西國にて野火消といふ火にやけさる草なりとや

長春花 花鏡を抄するに我俗にいふはらの長春にてなしは金蓮草の事なり世にきんせん花といふ
秋牡丹 遼生八歳を按するにしうめいきくなりかうらいきくふれきくとなさまくの和稱多し實は氣にあらすして花きく
如しの

仙入堂せんにゅうどう花鏡けいをみるにさぢや
 蚊ぶん子し樹じゅ紋もんのやと
 檉れい又別の木にして
 檀たん檀たん檀たん檀たん
 山さん木き利りハタツ
 虎耳草こにんそう
 淡竹草たんちくそうつるひやす
 花はなにそむえんと
 歌うたにいふよめり

前に書留しにや忘れし故其一二を筆す

甲午文月九日のあしたより野分いみじう吹て物騒しくれたる程風しつまりしか雲猶北に行て心よからず侍りし三河遠江は以の外の雨風にて洪水おひたしく數日旅人の通ひも絶侍る民家の愁さこそと覺侍るに漁人は此風を待得て悦ひあへり「南風に依て沖遠くありし魚の磯近くより網するに利あるか故なりされは愁喜兩ながら虚妄なるものを何

をか執して深く歎きあなちによるこひ侍るへき
やは袖ふく秋の初風しばししく覺え侍りしま
ゝ物に書付侍りし

鐘遠畑村老樹幽 雨暗雲嶺夕陽收

素風林下微涼夢 喚起一聲蘆荻秋

○靈まつる頃雲時々立おほひ雨打そゝきて月暗かり

しかは市門寂々として遊人歌笛の音も聞え侍らす

十六日の夜初て空澄て月さはやかに秋の灯も今宵

一夜の名残なりけりと見るそわはれなる府下風俗は十三四五六

燈す

市井殘燈習俗同 夜涼拂席世縁空

乾城槐夢轉爲昨 隻影月寒白首翁

孟蘭勝會排勝を書とかゝ

彩雲霽玉樹清沼布金華

蓮池露爽眼界潔金風度

蘭階露霽靈臺靜素月澄

○文月中頃むすめにおくれし人を弔ひ侍りて

萩の葉につゆちり初る風の音も

ことしよわきて袖ぬらすらん

返し

袖ぬらす露は夜ことに萩の葉の

色かはるまで風を身にしむ

○或問盆經に七月十五日百味五果を設て佛に供すと

五果とは何をかいふと云律の中に核果 櫻桃柿の類

膚果なしりんご瓜 漿果かやくる 榲桲松栢の實凡其外角果

大小豆さや

是を五果といへり

○近世鄧商家毎に立用の利を事とし米穀年々高く人

の憂多し今歲甲午夏我府下金一兩を以て新麥五斗

三四升をかふに至る其他諸物の直是に准してやす

からす剩へ錢をも立用して交易私多し此頃金一步

を以て錢わつか八百餘文をかふ士庶種に苦しむ七

月の初府下諸町等の市人錢貨立用の私により召捕

れて獄に繋かれ侍るされは商人等は是を罪あり

とも思はぬさ人慾の甚しき浮世の風俗尤いたむ

へし但し士もまた藏穀の直貴をのみよるこひて庶

民のなけきを忘れ侍るは不仁の至りといふへきの

み

○琉球國よりすき出す眞眼紙は唐土の竹紙のことく

にして亦我國有馬紙に似たり堅原にして色しろく

つやゝかなる紙なり「隣州頭王降府正の許より得侍る」其
國南方の氣を得て萬つ柔契に花美風雅を先とす國
製の器も亦夫故やさしきもの多し

去年十二月十九日の風に吹放されし船「尾府下南

家の船なり船頭は攝州大坂のものなり」と行末しれざり

しかは其日を忌日として吊ひなとせしに今年年

七月さつづ鴻より使あり琉球に吹つけられ恙な

く薩摩府迄渡り侍りしよし聞ゆ船のあやうき事

度々聞侍るは是に限らす

○八月八日の暴風前夜大雨海中ひかりて鳴動し八日の朝より雲北に飛ひ申刻も風あらく子刻甚し

凡そ石を飛ばし水を抜く其鳴とよむ音雷のこくとく駛

雨電々として窓壁すへて破れ倒る屋舎さながら轉

覆しておのつから壓死するもの間々多かる市井村

落是が爲にまよひさげふ聲「いふはかりなし田

園の損毛亦幾はくそや熱田のかたは高汐漲り來り

て陸をひたし堤を破る船みたれて没溺し家流れて

財を沈む川々亦洪水激して咩咩廢潰の異二津號情

なしや人民の愁聲今朝も街頭の恨話となりて聞も

いたまし扱も聞まとも狩艇に動せられて己か心を

くたくもありなき嶋廬の爲にそなやまされ侍るつ

らゝおもふたとひ房子傾き壁やふるゝとも火
災の跡なきかごとくならましものを且我身ひとり
の風かはとおもひすて侍るだもおろかにむねの中
驚苦し侍る這箇の小事にあふすら中々道理を没し
て思ひためぬ淺ましきといひ侍りしに或桑門
開てされは大方浮世を思ひすてぬさ此等にて
も知られ侍るかゝる風雨にたも心をみたり侍るそ
かしそも大漸の期至りなはさこそ志もたかひ侍ら
めと我なからつれなくあさしくこそ覺え侍ると
いへるも恥かしからぬかは我も人も大節に臨みて
動きなき志を持ち災害に遇てたはまさる機を失せ
ざるもの幾はくもまれなるにや采地ある身は只秋
實の少なからん事を思ひとして民の困しみをわす
れ農家は亦からくせたりけれなん事をあらかしめ
慮りながら領家の屋破れしを聞ては却て心よさ
まに彼や今を思ひしらんなとのゝしるもあさ
し凡そは上下情なく道なく沒有工夫一向貧客のみ
なるをすへき方なけれ商賈は彌濫叩して諸物の直
を増しあはるは難と、め錢をかくし法度國禁を犯
して刑をかへりみ侍らぬわさひとへに餓狗の熱油